

我妻栄の青春（4）

七戸，克彦
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/4772776>

出版情報：法政研究. 88 (4), pp.90-27, 2022-03-14. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics) Kyushu University

バージョン：

権利関係：



我妻栄の青春（４）

七戸克彦

- I プロローグ
 - 1 日本民法学の時代区分
 - 2 我妻法学の時代区分 …………… 以上 88 卷 1 号
- II 幼年時代（明治 30～36 年：0～5 歳）
 - 1 郷土
 - 2 家庭 …………… 以上 88 卷 2 号
- III 興譲尋常高等小学校時代（明治 36～42 年：6～11 歳）
 - 1 操行＝乙
 - 2 同年代との比較 …………… 以上 88 卷 3 号
- IV 米沢中学校時代（明治 42～大正 3 年：12～16 歳）
 - 1 チャッカリ秀才
 - 2 米沢藩・上杉家と雲井龍雄 …………… 以上本号
- V 第一高等学校時代（大正 3～6 年：17～20 歳）…………… 以下次号
- VI 東京帝国大学時代（大正 6～9 年：20～23 歳）
- VII エピローグ

IV 米沢中学校時代（明治 42～大正 3 年：12～16 歳）

【161】 我妻は、死去の 1 年前（昭和 47 年 10 月 21 日）母校・米沢興譲館高校の在校生向けの講演で、旧制中学時代の自分を次のように振り返っている。⁽¹⁾

どの学校でも非常な秀才という者がいるものです。秀才というのは、自分ばかり勉強して、他の奴には何も教えてやらない。一所懸命ノートをとり、予習も復習もする。ほかの者が「ノートを貸して呉れよ」と頼んでも、自分だけ勉強すればいいんだといって誰にも貸さない。運動会があつて疲れたから、明日は休みにするよう先生に頼もうという「俺は勉強したいからいやだよ。休みたい人は勝手に休めばいいよ俺は学校に来るから」こういうような者が必ずいるものだ。こういうのはね『チャッカリしている』というんですがね。このチャッカリするという言葉は非常にいい言葉ですよ。悪いことはしないんですよ。悪いことはしないどころか、ちゃんと規則正しくやっている。何んでもきちんとやって、ほかの奴と遊ぼうなんてしない。『ケチンボウ』なんていうのは消極的な意味しかない。『チャッカリ』というのはもっと積極的なものです。チャッカリ秀才というのがこの中にもいるんだらうといったのは、何を隠そうこの私がチャッカリ学生であつたのです。

したがって、クラスの中では常に評判が悪かつた。その証拠には、4年と5年とで級長の選挙をしましたが、級長には選ばれなかつた。副級長にはなつた。それでは2番目に人気があつたかというところでもない。中に政治的な考え方をする男がいて、「我妻栄は気に入らない奴だが、副級長にしておこう。あれは先生たちに評判がいいから教員室にやって談判させるのに役立つじゃないか」と、そういう策士がいたんですね。そして、その男のいう通り私は副級長になつて、教員室によく談判にやられたものです。しかし人望はなかつたんですね。非常にチャッカリしてつたのです。そのチャッカリというのは成績は非常に良い、先生の評判は良い、模範学生でしょう考えようによっては、賞められてよさそうなものだけれども、仲間の評判は良くない。

だが、このエピソードもまた、小学生時代の「操行＝乙」の逸話と同様、額面通りに受け取ることは難しい。第1に、この言辭は、続く一高時代の話——「私の中学時代のチャッカリさを改めさせる非常に大きな転機があつた。それは、第一高等学校の全寮制度で、みんなが一緒に勉強してつた3年間⁽²⁾です」——の前振り

(1) 我妻栄「日本人は今世界中から憎まれてつる」『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅰ注(121)9-10頁……〔所収〕我妻栄『民法と五十年・その3——随想拾遺(下)』前掲Ⅰ注(121)324-325頁。引用は〔初出〕による。以下同様。

(2) 我妻栄「日本人は今世界中から憎まれてつる」前掲注(1)11頁……〔所収〕325頁。

ある。また、第２に、学友たちの証言からすれば、彼は実際には決して「仲間の評判は良くない」人物ではなかった。

【162】 前章（Ⅲ）で触れたように、小学校では明治27年文部省訓令第6号（【103】〔別表〕C②⑥）で席次の序列化が廃止され、明治33年文部省令第14号「小学校令施行規則」（【103】〔別表〕C②⑨）で進級・卒業試験が廃止されたが、これに対して、中学校・高等学校・大学における進級・卒業試験と席次の序列化は、その後も法令上維持された。中学校に関していえば、明治34年3月5日文部省令第3号「中学校令施行規則」47条1項が「各学年ノ課程ノ修了又ハ全学科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ学業及試験ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ」と規定する。

中学時代の我妻は、全科目平均点が、1年次93.25点、2年次92.92点、3年次95.53点、4年次95.28点、5年次96.07点と、常に抜群の成績で首席を通した⁽³⁾。彼の同級生（計77名）の紹介を兼ねて、『創立満20年記念・山形県立米沢中学校一覧』記載の卒業時の席次と進路を転記すると、〔別表Ⅳ-1〕のようになる⁽⁴⁾（進路の未記載は原典空欄。浜田広助〔広介〕が最下位の理由については後に触れる。【199】）。

1 チャッカー秀才

【163】 我妻が中学時代「チャッカー秀才」になった理由には、通学先が父・又次郎の勤務する学校だったことが影響している。

我妻は、小学校1～2年の頃の次のような思い出を、繰り返し語っている⁽⁵⁾。

私がまだ小さかった頃、親父がこの学校に宿直した日、弁当を届けに来たことがありました。というのは私の親父がこの興譲館で40年程英語の先生をしておりまして、その時廊下に雀が迷い込んで来たので、親父と一緒に、小使室の方からと化学室の方から追い込んで、雀取りをしたのを覚えております。それ以来、私はこの校舎に親しみを感じて来ました。

(3) 松野良寅「米沢の精神風土と我妻栄先生」『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅱ注(86) 188頁。

(4) 『創立満20年記念・山形県立米沢中学校一覧』（大正5年9月）前掲Ⅲ注(84) 159-163頁。

(5) 我妻栄「新しい秩序」〔初出〕興譲5号（昭和34年）……〔所収〕『民法と五十年・その3——随想拾遺（下）』前掲Ⅰ注(121) 256頁。我妻栄「デモクラシーと秩序」〔初出〕興譲2号（昭和32年）……〔所収〕『民法と五十年・その3——随想拾遺（下）』前掲Ⅰ注(121) 233頁も参照。

〔別表Ⅳ-1〕 米沢中学校大正3年3月(第22回)卒業生席次

① 我妻栄 (→第一高等学校)	② 本田吉馬 (→農業・自治講習会)	③ 竹前源蔵 (→東京高等工業学校)
④ 鈴木重助 (→第一高等学校)	⑤ 稲村健次郎 (→商業)	⑥ 小沢雄造 (→米沢高等工業学校)
⑦ 倉石槐三 (→第二高等学校)	⑧ 桜井克巳〔克己〕 (→米沢高等工業学校)	⑨ 太田孝市 (→第二高等学校三部)
⑩ 尾形一郎 (→南満医学堂)	⑪ 和田三郎 (→海軍兵学校)	⑫ 〔松木→〕高橋与市 (→第二高等学校三部)
⑬ 庄田次郎 (→第二高等学校一部甲)	⑭ 高橋恒次郎 (→第一高等学校)	⑮ 山森亀之助 (→海軍兵学校)
⑯ 〔星→〕外田麟造 (→第二高等学校)	⑰ 鈴木佐光 (→師範二部・小学校教員)	⑱ 推谷伊六郎 (→東北帝大工学専門部)
⑲ 長沼篤次 (→大坂〔阪〕高等工業学校)	⑳ 江辺清夫 (→第二高等学校)	㉑ 村山薫 (→実業)
㉒ 安部〔安倍〕寿太郎 (→農業)	㉓ 志釜幸太 (→舞鶴海兵团)	㉔ 太宰直志 (→千葉医学専門学校)
㉕ 鈴木広達	㉖ 小笠原常蔵 (→商業)	㉗ 西磐 (→水産講習所)
㉘ 金泉虎雄 (→外国語学校)	㉙ 佐藤俊夫 (→東京高等師範学校)	㉚ 高橋六郎 (→陸軍士官学校)
㉛ 佐々木新三郎 (→実業)	㉜ 長五郎 (→陸軍主計候補生)	㉝ 金井栄一郎 (→米沢高等工業学校)
㉞ 舟橋清 (→米沢高等工業学校)	㉟ 青木千代吉 (→農業)	㊱ 黒金泰雄 (→慶応義塾)
㊲ 鈴木一 (→米沢高等工業学校)	㊳ 嶋倉宮雄 (→東洋協会植民専門学校)	㊴ 梅津捷夫
㊵ 山本茂 (→長崎高等商業学校)	㊶ 岡和一 (→法政大学)	㊷ 長谷川一郎 (→酒造業)
㊸ 藤倉利雄 (→師範二部・小学校教員)	㊹ 森亮一 (→米沢高等工業学校)	㊺ 安原金男 (→外国語学校)
㊻ 近藤留吉 (→商業)	㊼ 渡部長蔵 (→商業)	㊽ 布施千代雄 (→新潟医学専門学校)
㊾ 伊東三郎 (→外国語学校支那語学)	㊿ 後藤静雄 (→日本医学専門学校)	㊽ 蘆川良徳 (→米沢高等工業学校)
㊽ 伊藤正雄 (→早稲田大学高等師範部)	㊿ 湯野川繁雄 (→慶応義塾)	㊽ 窪田清 (→鉄道院雇)
㊽ 齊藤与四郎 (→日本大学)	㊿ 土佐林秀逸 (→師範二部・小学校教員)	㊽ 鈴木一平
㊽ 須貝広司	㊿ 矢島富五郎 (→青山学院英語師範学校)	㊽ 遠藤忠恕 (→東京高等商業学校)
㊽ 星政之助 (→高等予備校)	㊿ 遠藤義雄	㊽ 栗林胤衛 (→青山農業大学)
㊽ 齊藤和也 (→東京慈恵医院医学専門学校)	㊿ 島津隼人 (→東京蠶糸専門学校)	㊽ 松浦丈児〔文児〕
㊽ 中津川彦一 (→山形県庁土木課)	㊿ 高橋繁 (→東京府中野電信隊)	㊽ 増淵宇吉 (→実業)
㊽ 小倉武雄	㊿ 船山一雄	㊽ 湯村一郎
㊽ 西沢信雄 (→織物製造)	㊿ 中島義男 (→朝鮮総督府郵便貯金管理所)	㊽ 曾矢義三郎 (→日本歯科医学専門学校)
㊽ 上泉秀信 (→洋画自修)	㊿ 浜田広助〔広介〕 (→私立早稲田大学)	

私はこの校舎で勉強したわけですが、３年の時、親父に教わり、時にはあてられたりしまして、あまりかっこうの良いものではなかったものです。

中学時代の我妻は、周囲から「児雷子^{じらいこ}」と呼ばれていた。貧乏でポマードも買えず髪^{かみ}の毛が逆立っていたため「児雷様」（「児雷也」先生の尊称）とあだ名されていた英語教師・我妻栄又次郎の子供——それが中学校における我妻の立ち位置であった⁽⁶⁾。親孝行の彼は、成績不良で父親に恥をかかせてはならぬとのプレッシャーを、絶えず感じていたであろう。

（１）山形県立米沢中学校

【164】現在の山形県立米沢興譲館高等学校の、我妻入学当時の校名は、山形県立米沢中学校——同校に関して、我妻が入学した明治42年4月刊行の市川藤太郎（編）『米沢案内』には、次のようにある。⁽⁷⁾

山形県立米沢中学校

関東町にあり本校の来歴は元禄10年10月上杉弾正大弼綱憲始めて学問所並に聖堂を元細工町に建つ安永5年2月上杉弾正大弼治憲祖業を紹述し大に学館を拡張し之を興譲館と称し教官を置き藩士並に町村の子弟を通学せしむ明治4年廃藩置県の時に当り県の学校となりたりしか全7年之を廃し更に私立米沢中学校となす明治19年9月19日北堀端片町に移転し明治33年4月県立に改め全年9月現位置に新築移転す明治41年9月15日 皇太子殿下本市へ行啓の際本校へ臨御親しく御覧あらせられたり現在の生徒は595名なり

(6) 「うちの親父さんは、大変生徒から信望があったものですから『児雷様』と、様をつけて言う人が多かった。私が同じ学校に入学しました時、親父にくっついて学校に来たわけで、早速私は児雷子という名前を貰った。私の綽名は児雷子なんで、その辺にいらっしゃる大先輩は、私をこの間まで児雷子とおっしゃっていた。実は、私には児雷子と言われた方が、この校舎ではぴったりする思い出の言葉であります」。我妻栄「地方の高校生の責任」『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅰ注(121)9-10頁……〔所収〕『民法と五十年・その3——随想拾遺(下)』前掲Ⅰ注(121)288頁。なお、本田吉馬「守一無二無三」前掲Ⅰ注(102)20頁にも、「我妻博士は〔米沢〕市内中央三丁目旧鉄砲屋町に生れ、私の一つ歳下、我妻又次郎先生、尊称別名自雷様の御曹子、先輩が自雷子と奉っていた」とある。さらに、我妻栄「法律に於ける道徳性と非道徳性」〔初出〕興譲創立50周年記念号(昭和11年)……〔所収〕『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅰ注(121)87頁(なお、この論稿に関しては、我妻洋=唄孝一(編)『我妻先生の人と足跡——年齢別業績経歴一覧表』前掲Ⅰ注(3)に掲記がない、我妻栄「財団法人自願奨学財団設立趣意書」『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅰ注(121)128頁……〔所収〕『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注(32)128-131頁、『民法と五十年・その3——随想拾遺(下)』前掲Ⅰ注(121)374-375頁も参照。

(7) 市川藤太郎(編)『米沢案内』前掲Ⅱ注(126)84頁。

文中に「明治19年9月19日北堀端片町に移転し」とあるのは、新校舎落成式の日であり、同日は安永5年(1776年)興讓館で細井平洲が書経を講じた日にちなんだものであって、現在の興讓館高校の開校記念日になっている。

また、文中には「現在の生徒は595名なり」とあるが、当時の県立中学校の生徒定員は600名以下とされており(中学校令施行規則20条)、山形県下の4つの中学校に関しては、山形中学・庄内中学・米沢中学が各600名、新庄中学が400名であった(山形県立中学校学則⁽⁸⁾2条)。

一方、我妻在学中の米沢中学の生徒数は〔別表Ⅳ-2〕の通りである。

ア 入学試験

【165】 上記「山形県立中学校学則」8条は、「第1学年入学志願者中尋常〔高等〕小学校ヲ卒業シタル者ノ数、入学ヲ許スヘキ人員ニ超過シタルトキハ国語、算術、日本歴史及地理ニ就キ尋常〔高等〕小学校卒業ノ程度ニ依リ試験ヲ行ヒ入学者ヲ選抜ス」と規定する(中学校令施行規則42条・43条を受けた規定)。

我妻が入学した明治42年の入学志願者数・合格者数・合格率は〔別表Ⅳ-2〕の通りであるが、この年の米沢中学の入学試験問題を入手できなかったので、岸信介が受験した岡山中学の算術の入試問題を転記しておく。⁽⁹⁾

○算術科 (1時間半)

- (1) $437 \times 5078 \div 276$ ヲ計算セヨ
- (2) 神戸岡山間ノ鉄道線路ヲ89哩トシ此間ヲ最急行ノ汽車カ走ルニ3時間ヲ要スルトセバ此汽車ハ1時間毎ニ平均何里何町何間何尺ヲコクカ但シ1哩ハ14町45間1尺ナリ
- (3) 商人アリ鶏卵1個ニツキ2銭1厘ニテ300個ヲ仕入レ之ヲ1個ニツキ2銭6厘ニ売イシニ運搬ノ際若干個破損セシタメ僅ニ8拾5銭ヲ利セリトイフ破損セシ鶏卵ノ数如何
- (4) 一様ノ水絶エズ流レ落ツル滝アリ池ニ入りテ満水セリ今コノ満水セル池ノ水ヲ「ポンプ」1台ヲ用キ18分時間ニシテ汲ミ尽セシ後12分時間休息セシニ又満水セリトイフモシ同様ノ「ポンプ」3台ヲ用キナバ幾分時間ニシテ汲ミ尽シ得ルカ

(8) 明治34年3月告示第58号……〔改正〕明治45年3月15日山形県告示第57号。

(9) 『42年度岡山県諸学校入学試験問題及解答』(吉田書店、明治43年)「岡山、津山、高梁、矢掛各中学校入学試験問題」4-5頁。

〔別表Ⅳ-2〕 我妻在籍当時（明治42年4月～大正3年3月）の米沢中学校

			明治42年度 我妻1年次	明治43年度 我妻2年次	明治44年度 我妻3年次	明治45年度 我妻4年次	大正2年度 我妻5年次
生徒	1年	志望者	198	167	150	170	206
		入学者	116	131	131	134	143
		合格率	59%	78%	87%	79%	69%
		生徒数	136	137	152	146	158
		学級数	3	4	4	4	4
	2年	志望者	20	13	4	1	0
		入学者	7	4	4	1	0
		合格率	35%	30%	100%	100%	-
		生徒数	121	125	128	121	126
		学級数	3	3	3	3	3
	3年	志望者	1	0	1	4	2
		入学者	1	0	1	4	2
		合格率	100%	-	100%	100%	100%
		生徒数	115	109	106	128	127
		学級数	3	3	3	3	3
	4年	志望者	2	2	0	2	2
		入学者	2	2	0	2	2
		合格率	100%	100%	-	100%	100%
		生徒数	112	106	96	100	97
		学級数	3	3	3	3	3
	5年	志望者	0	1	0	0	0
入学者		0	1	0	0	0	
合格率		-	100%	-	-	-	
生徒数		91	85	81	72	82	
学級数		3	2	2	2	2	
合計	生徒定員	600	600	600	600	600	
	生徒総数	575	562	563	567	590	
教員	職員総数	27	27	25	26	26	
	有資格者	22	22	25	21	22	
	無資格者	5	5	0	5	4	
学校経費	経費総額	20,397,660	20,710,660	20,926,220	22,457,480	21,702,280	
	臨時費	0	125,510	0	0	0	

〔出典〕 文部省普通学務局『全国公立私立中学校ニ関スル諸調査』（明治42年～大正2年）、『山形県立米沢中学校一覽』前掲Ⅲ注(84)「職員、生徒、卒業生ノ員数及経費総額附建築費累計一覽」。

【166】 なお、〔別表Ⅳ-2〕明治43年の2年編入組（4名）の中には、高橋与市（〔別表Ⅳ-1〕⁽¹⁰⁾）⁽¹²⁾）がいる。明治40年改正小学校令（〔124〕⁽²⁾）で義務教育化された尋常小学校6年卒業後の進学先は、中学校と高等小学校に分かれたが（前者の進学先は高等学校、後者の進路は軍人か専門学校）、浜田広介のように高等小学校卒業後に中学を受験する者や、高橋与市のように高等小学校の途中で中学に編入する者もあった。

長井高等小学校を中退して米沢の伯父・加藤慶三郎（眼科医）宅に寄宿した高橋は、伯父から「オレの知っている興讓小学校の先生で赤井先生と云う人が居る。夕方からのこの先生の家に行って習って入学試験の準備をすることだ」と告げられる。⁽¹¹⁾ 我妻栄の終生の師・赤井運次郎（〔142〕）は、高橋与市の師でもあったのである（赤井は明治43年2月高橋の中学への入学志願手続も行っている。⁽¹²⁾）。

そして、高橋は、赤井から「2年編入試験には中学1年の課目もあるぞ。英語、漢文等これからこれ等の課目も一通りやらねばならない。それには都合のよい事に自分の教え子、鉄砲屋町の我妻君が今1年生だ。彼に言って置いたから、彼の習っている英語、漢文を習って来い」と命じられ、「我妻先生（我妻の父は中学の英語先生だった）の所に毎日真面目に通い教った。我妻からは習い終わった本など色々借りて暇次第に面白がって読み書き勉強し、そして又よく覚えたらしい⁽¹³⁾」。後年、高橋は、次のようにも語っていたという。「私にとっては我妻栄君ではなく、我妻栄先生⁽¹⁴⁾である。それは中学受験前勉強を教わったからだ」。

(10) 松木光弥・ひろ夫婦四男として明治28年3月19日西置賜郡長井村大字森（現：長井市）に生まれた彼は、大正3年米沢中学校卒業後2浪して大正5年第二高等学校第三部（医科）に入学、大正8年卒業時に山形県土族・高橋達之助の長女モトと結婚して婿養子となり、同年東京帝国大学医学部進学、大正12年卒業後は同大学副手となり、東京の病院に勤務した後、昭和7年米沢に帰郷し中条病院の副院長となる。戦後の昭和22年米沢市医師会長、同年中条病院院長。昭和61年10月16日死去、享年92歳。高橋宏（編）『思い出の記・高橋与市』（高橋宏、昭和63年）。

(11) 『思い出の記・高橋与市』前掲注（10）46頁、324頁。

(12) なお、『思い出の記・高橋与市』前掲注（10）47-49頁には、当時の赤井の居宅や家族の様子が詳細に描かれている。「赤井先生の御宅は座頭町のはずれの奥まった古いかやぶきの家だ。戸の口入ると2、3畳敷の板間、続いて右手は茶の間膳部、左に入ると座敷で、細長い机が3つ4つ並べられている」「先生の御家族は先生の御母様と先生御夫妻（先生は運次郎、奥様も学校の先生でおとら、先生はお婿さんで前には中沢先生と呼ばれていたと云う）おとら先生の妹のおとみさんと子供衆4、5人（一男、清、浩等）賑やかに夕飯をとって居られた」「おとら先生も同じ興讓小学校の先生だ。妹のおとみさんはよいちと同年輩位で明年高等女学校の入学試験を受けるんだと云うことで自分と一緒に勉強させられていた」。興讓小学校の女教師の婿養子という点で、赤井運次郎は、我妻の父・又次郎とよく似た境遇である。

(13) 『思い出の記・高橋与市』前掲注（10）50-51頁。

ちなみに、岸信介については、高等小学校２年次に転校・寄宿していた岡山の叔父・佐藤松介が急死したため、義理の叔父（母・茂世の妹・さわの夫）吉田祥朔（山口中学の地理・歴史教師⁽¹⁵⁾）を頼って、明治44年５月岡山中学の３年生から山口中学の３年生に転入している。

イ 教員

【167】 我妻が在籍した時期（明治42年４月～大正３年３月）の米沢中学校の教員を、内閣印刷局『職員録』と『創立満20年記念・山形県立米沢中学校一覽』の職員名簿から抜き出すと、〔別表Ⅳ-3〕のようになる。

【168】 当時の米沢中学の教員について、我妻は次のように回想する。⁽¹⁶⁾

私が中学に居ったのは明治42年から大正３年まで、もう20年の昔。当時の先生で未だに教鞭をとって居られるお方は勿論一人もあるまい。亡き人の数に入られたお方も少なくない。化学の永井〔年郎。〔別表Ⅳ-3〕⁽²⁴⁾〕先生の訃をつい〔昭和10年〕７月の末に聞いた。真暗になる実験室で騒ぎ廻って、やさしい先生を一度ひどく怒らして閉口したことがあった。怒らしたといえば、国語の先生に「貧相」というあだ名をつけ、それを黒板に書いて置いて、恐ろしく叱られたこともあった。鷹山公まで引き合いに出して師弟の道を痛烈に説かれた先生の瘦躯をほとばしる火のような気魄には、悪童連も縮み上ったものだった。その先生も今は既に逝かれたとか。元気な井熊〔幸作。〔別表Ⅳ-3〕⁽¹⁴⁾〕先生も長い患いにすっかり健康をそこねて居られるとか。例の首を振り振り体操を説き軍略を論じ、国政に及ぶ先生の雄弁もなるかしい思い出の一つ。

「貧相」のあだ名の国語の先生が、新村茂（〔別表Ⅳ-3〕⁽⁴⁵⁾）・神津包明（⁽⁴⁶⁾）のいずれであるかは調査しきれていないが、この一件に対する後悔の念を、我妻は後年まで引きずっていたようで、戦後、東大退官２年後（我妻62歳）の母校の高校生に対する講演でも、次のように語っている。⁽¹⁷⁾

(14) 今田久夫「我妻と兩声会」我妻栄記念館だより7号（平成17年）1頁。

(15) なお、吉田祥朔・さわ夫婦の長男・寛（1902-1940）も秀才で、東大法学部在学中に外交官試験に合格して大正13年中退、亜米利加局第一課長となり、吉田茂の長女・桜子と結婚するが、昭和15年12月1日急性肺炎で急逝した。享年38歳。岸信介・前掲Ⅲ注（133）①『我が青春』150頁参照。

(16) 我妻栄「思い出」〔初出〕興譲50周年記念号（昭和11年）……〔所収〕『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅰ注（121）132頁、『民法と五十年・その2——随想拾遺（上）』前掲Ⅱ注（87）290頁。

(17) 我妻栄「新しい秩序」前掲注（５）〔初出〕59-60頁……〔所収〕257頁。

〔別表Ⅳ-3〕 我妻在籍当時（明治42年4月～大正3年3月）の米沢中学校教職員

	氏名	職位	着任	離任	族籍	担当科目等
①	笹生新太郎	書記	明治26・8	明治43・1（退職）		会計
②	上杉熊松	教諭	明治27・4	大正4・6（退職）		図画
③	西朝正	教授囑託	明治28・4	明治45・6（退職）		体操
④	土肥精一郎	教諭兼舎監	明治28・7在職	大正5・9在職	山形・土	国語・習字
⑤	我妻又次郎	教諭	明治28・11	大正10・10（退職）	山形・平	英語
⑥	戸沢又太郎	教諭	明治29・7在職	大正5・9在職	山形・土	歴史・漢文・法制経済・修身
⑦	大嶋益之助	書記	明治29・7在職	大正5・9在職	山形・土	会計
⑧	松山亮	校長（6代）	明治33・4・12	大正1・10・14（依願免）	和歌山	修身
⑨	佐藤信純	教諭	明治33・5	昭和5・3	山形・土	英語
⑩	松嶋克生	教諭	明治33・8	明治44・3（転任）		博物・地理
⑪	坂田忠次郎	教諭	明治34・8	明治43・4（休職）		数学
⑫	五十嵐勝蔵	教諭	明治34・8在職	大正5・9在職	山形・土	英語
⑬	渡部誠一郎	書記	明治34・10	大正3・3（休職）		教務
⑭	井熊幸作	教諭	明治34・10在職	大正5・9在職	山形・土	体操
⑮	岡龍蔵	書記	明治34・10在職	大正5・9在職	山形・土	庶務
⑯	倉橋文助	教諭	明治35・3	大正1・9（休職）		修身・歴史
⑰	北岡安見	教諭	明治35・8	大正1・8（転任）		国語
⑱	桜場春景	教諭	明治35・12	明治45・5（転任）		国語
⑲	佐藤契	教授囑託	明治40・4	明治42・5（解職）		
⑳	江川平太郎	教諭	明治41・4	大正1・8（転任）		数学
㉑	佐藤種徳	教諭	明治41・4	大正1・10（転任）		国語
㉒	スマート		明治41・6	明治42・5（解職）	米国	
㉓	藤本憑太郎	教諭	明治41・10在職	大正5・9在職	福岡・土	英語
㉔	永井年郎	教諭	明治41・10在職	大正5・9在職	群馬	物理・化学
㉕	山中行信	教諭	昭和41・10在職	大正5・9在職	山形・土	国語・漢文・習字
㉖	小杉清助	教諭	明治42・1	大正2・3（転任）		
㉗	本郷良喜治	教諭	明治42・1	大正2・4（転任）		
㉘	斉藤友次郎	教諭	明治42・1	大正2・8（転任）		

29	佐藤正明	教諭	明治42・4	明治43・8（転任）		
30	大乘寺良一	教授嘱託	明治43・9	明治45・5		
31	平賀仙三郎	教授嘱託	明治44・4	大正2・3・24		
32	猪狩幸四郎	教授嘱託	明治44・5	明治45・3（解職）		
33	広中佐兵衛	教授嘱託	明治44・5	明治45・3（解職）		
34	綿貫庚一郎	教諭	明治44・5在職	大正5・9在職	山形・士	数学
35	尾形小七郎	教諭兼舎監	明治44・5在職	大正5・9在職	山形・士	博物
36	齊藤鍋蔵	教授嘱託	明治45・4	大正2・3（解職）		
37	茂田井順平	教諭	明治45・5在職	大正5・9在職	新潟	博物・農業
38	伊東茂松	教授嘱託	明治45・5在職	大正5・9在職	山形・士	物理（理学士）
39	ワットソン	教授嘱託	明治45・6	明治45・9		
40	山本音次郎	教授嘱託	大正1・9	大正5・2（解職）		
41	下平忠良	校長（7代）	大正1・10・14	大正4・3・31	山形・士	（法学士）
42	妹尾盛親	教諭	大正1・10	大正4・10（転任）		
43	高橋良一	教諭	大正2・7在職	大正5・9在職	岩手	英語
44	新田勇	教諭	大正2・7在職	大正5・9在職	福岡	体操・歴史・柔道
45	新村茂	教諭兼舎監	大正2・7在職	大正5・9在職	栃木	国語・漢文
46	神津包明	教諭	大正3・5在職	大正5・9在職	長野	国語・漢文
47	永井兼吉	教諭	大正3・5在職	大正5・9在職	東京	数学
48	窪島政男	教諭	大正5・5在職	大正5・9在職	山形・士	図画
49	福士匡	教諭	大正5・5在職	大正5・9在職	青森・士	数学
50	藤原正	教諭		大正5・9在職	山形	修身・歴史（文学士）
51	大橋熊蔵	教授嘱託		大正5・9在職	山形・士	地理
52	桐生幹	教授嘱託		大正5・9在職	山形・士	体操
53	高村綱男	教授嘱託		大正5・9在職	山形・士	国語
54	渡部兵馬	教授嘱託		大正5・9在職	福島	柔道
55	逸見重蔵	教授嘱託		大正5・9在職	山形	国語
56	山田俊作	教授嘱託		大正5・9在職	山形・士	剣道

〔出典〕内閣印刷局（編）『職員録』、『山形県立米沢中学校一覽』前掲Ⅲ注（84）「第六職員及卒業生」「一、現在職員」「二、旧職員」。

ある時、新任の国語の先生に、「ヒンソウ（貧相）」というあだ名をつけたことがありました。いつもよれよれの背広を着て来たので、そんなあだ名をつけたのです。ある日、その先生の授業の時に黒板にヒンソウと書いておきましたら、そこへ先生が入って来て、その黒板の字を見ると、顔色を変えました。そしてしばらく黙っていましたが、静かに次のように言いました。

「私にヒンソウというあだ名のついていたのは、前から知っておりましたが、あだ名を黒板に書かれたのは初めてです。しかも、興譲中学校でそんなことをされるとは思ってもみませんでした。赴任する前には、ここは、上杉鷹山公が細井平洲先生をお迎えになった時、わざわざかごからおりて、お迎えになったと聞いておりました。米沢というところは、師弟の情の厚いところで有名であるとおったのに、そこでこんなことをされるとは思いませんでした。私は、月給が安い子供がたくさんおります。勉強をしたいので参考書も買いたい。それで残念ながら服が買えないのです。だからヒンソウなのだ。そんなに言いたいのなら言いたまへ！」

それから後は、その先生をヒンソウという人は余りなくなりました。洋服を買わないで参考書を買う熱心な先生として、私はその先生を忘れられません。

このほか、我妻の父・又次郎（〔別表Ⅳ-3〕⑤）と同じ英語教師の佐藤信純（⑨）に関しては、彼の子息による次の文章がある⁽¹⁸⁾。

小生の父信純も中学校が県立になった明治33年に採用され、「助教諭心得」として英語を担当した。したがって小生の父信純と又次郎先生は同時期に英語教師として教鞭をとったことになる。当時の中学校では英語担当の有資格者はごく僅かしか居らず、ほとんどが文部省の教員検定による資格取得者であった。当時検定合格は決して生やさしいことではなく、辛酸をなめる日々を送ったらしい。従ってお互い同様の苦勞を味わっていたこと故、通ずるものが多かったと想像される。

【169】 なお、大正元年10月（我妻4年生当時）の松山亮（〔別表Ⅳ-3〕⑧。和歌山県⁽¹⁹⁾人）から下平忠良（④。米沢出身）への校長交替は、本田吉馬（〔別表Ⅳ-1〕②）に

(18) 佐藤英男「又次郎先生のこと」我妻栄記念館だより7号（平成17年）2頁。なお、佐藤信純の米沢中学在職時の職位・俸給の詳細に関しては、『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注（32）41頁参照。

(19) 米沢中学校興譲会（編）『米沢藩学問所・興譲館・米沢中学校年志』（米沢中学校興譲会、昭和2年）48-49頁、山形県立米沢興譲館中学校（編）『沿革史』（山形県立米沢興譲館中学校、昭

よれば、以下のような教員排斥運動の結果とされる。⁽²⁰⁾

四方山にかこまれた米沢から、早く山下〔源太郎。明治12年私立米沢中学卒業〕海軍大将を始め十数人の将官、著名な博士、学者を送り出したが、次第に進学率が減退、在京の先輩からも郷土の有識者の中からも、米沢人の士気が衰えたとか、藩学精神が遠のいたとかかくの批判をうける様になった。これが学生に反映して学生同志の内から校風刷新が叫ばれ出した。私共4年生の時代になると先輩学生の騒動が白熱化して、遂に先生方の排斥運動にまで発展し、当時の校長外数名の教師の転任をみた。在京の大先輩も母校のため刷新にのり出し、全く異例な当時賞勲局書記官の下平忠良〔別表Ⅳ-3〕⁽²¹⁾ 先生が校長に任命された。

私共5年生も我妻栄さん（甲組級長）を旗頭にして、僕は副格（乙組級長）として、風紀刷新宣言文起草委員会をつくり、放課後或いは校内で、時としては、松川の河原の石の上で十数人の委員会を開き熟議を重ねた。あのやさしい栄さんがと後世の人が言うが、自身一高志願の実現を目指しているので熱心に論議されたことは僕の日記に記されている。

我妻にとって中学校時代最大の事件は、この4年生～5年生の時（明治45年～大正2年）に起きた、興譲館の先輩や米沢の有力者による、校風刷新＝進学率向上運動であった。上記引用にある「風紀刷新宣言文起草委員会」の長が我妻栄、副が本田吉馬であった理由も、この学年の成績1位が我妻、2位が本田だったからで（2人は卒業時に県知事から成績優秀者表彰を受けている）、彼らが起草した「風紀刷新宣言文」の文面は確認していないが（おそらく現在の山形県立米沢興譲館高校に保存されているであろう）、この「宣言文」は、在校生からすれば「高等学校合格誓約文」の意味合いを持っている。その起草は、「児雷子」（＝先輩たちが進学率低迷の批判を浴びせる教師の子）の首席生徒である我妻にとって、猛烈な心理的重圧になったであろう。

【170】 一方、教員の排斥運動について、高橋与市は次のように追懐する。⁽²¹⁾

或る〔明治45年：高橋4年〕第1学期半ばの日、学校に行ってみると、先輩5年

和11年）103頁、彼の履歴が記載されている。

(20) 本田吉馬「守一無二無三」前掲I注（102）21-22頁。

(21) 『思い出の記・高橋与市』前掲注（10）68-70頁。

生が居ない。5年生が同盟休校している。聞けば彼等は皆遠山の寺に立て籠って居るとのこと、何が何んだか少しも知らない。

校長〔松山亮。〔別表Ⅳ-3〕⑧〕と倉橋文助〔⑩〕教頭との排斥運動だとか。その理由は何もわからん。吾等4年生の連中誰言うともなく『4年生も黙って居られないではないか。皆んなで相談しよう。今夜8時松川々原（通町裏）に集れ』と云うことになった。誰が言い出したか、わからないが⁽²²⁾。

……〔略〕……。

そしてその翌日はいつも通り学校に出た。皆んなも出て来ていた。地理の時間だった。小杉天外先生（清助〔〔別表Ⅳ-3〕⑯〕先生で小杉速、花子等の父）だ。先生は米沢人だ。先生はこの時間教科目はやらず、1時間タップリ叱られた。（吾が同級に先生の弟に当たる金泉席雄〔虎雄。〔別表Ⅳ-1〕⑳〕君が居た）『5年生のバカ者ども何をしているのだ！ 君達はよく考えてみろ！ このバカ者どもに同調する様な事をすると、オラーかまわぬゾ！』と最後の一喝。而も先生は涙を流しての大喝だった。

その日、5年生の籠って居る遠山のお寺に伊佐早謙先輩、大元老が行かれて説教されている事だった。翌日は同盟休校も解かれて、5年生一同が沈んだ顔して皆登校していて吾々も安堵した。

【171】 一方、この同盟休校の実行当事者である5年生の平貞蔵も、次のような文章を残している⁽²³⁾。

ストライキをやったことがある。いつもは寄宿舎の連中が反対してできなかったのを、寄宿舎を代表する私が賛成したものだからストライキにはいって、そのころよくいった“米沢の美風”を守るために、ということで、国語の先生、英語の先生、そして歴史の先生である教頭の3人を排斥したのである。そこで先輩たちに呼びつけられて、ストライキをやめろといわれたけれども、議論では私たちのほうが勝ってしまう。

(22) 〔七戸注〕高橋与市ら4年生が集合した「松川々原（通町裏）」は、その後5年生になった我妻栄や本田吉馬が熱心に委員会を開いた場所でもある（【169】）。

(23) 平貞蔵（1894-1978）に関しては、『平貞蔵の生涯』（平記念事業会、昭和55年）、『続・米沢人国記（近・現代篇）』前掲Ⅲ注（108）207頁、水戸部浩子『平貞蔵と山形県』（県地域開発史作成事務局（編）『山形県地域開発史』（山形県地域開発史作成事務局、平成5年）別冊）参照。

(24) 『平貞蔵の生涯』前掲注（23）35-36頁。

最後に諫早謙〔伊佐早謙〕という先生が出てきた。この人は非常な学者で、「東北の歴史」「米沢藩の歴史」を書き、日本の中世から近世にかけてのある時代に関してはこの先生の意見を聞かなければならないといわれるくらい重んじられた人だったが、当時はどのくらい偉いかということもわからなかった。大学を卒業したあと、日本の歴史をやっている学者が４、５人集って「今日は米沢から諫早〔伊佐早〕先生にお出でねがうので、きみも米沢出身なら同席しろ」といわれて同席したことがある。そのとき「諫早〔伊佐早〕先生は湯豆腐で青松黒松のお酒を飲むのがお好きだから」といって、それをちゃんと用意し、実に礼儀正しいのでびっくりした。それほど先生とは知らず、ストライキをやるときに、最後の判断を諫早〔伊佐早〕先生に求めようということになって、代表４、５人と一緒に出かけて理屈をいったところ、「とにかく、きみたちの考えているいいところは最大限に生かすようにするから」といわれて、ストライキをやめることにした。

その結果、だれも処罰されなかったけれども、そのとき３人の先生を排斥したことは、一生の後悔の種だ。３人の先生がいかに傷つかれたか、そして、あんなことをする必要はなかったのではないか、と考えると、ほんとうに申訳ないという気持がする。あのときは、米沢の伝統とか、米沢の美風などということだけで妙に興奮して、それをつきつめて考えもせずにやってしまったことを、いまにいたっても後悔するのである。のちに米沢に関係してから、米沢の人が「米沢の伝統を重んずる」などというと、私は「なんだ、そんなもの」というくらいになった。

高橋や平の言に登場する「先輩、大元老」伊佐早謙⁽²⁵⁾（幸吉：1858-1930）は、安政５年12月（1859年1月）米沢藩士（御小納戸組）の子として上花沢信濃町に生まれ、興讓館に学んだ人。明治19年より米沢中学で教鞭をとる一方、米沢藩・上杉家の史書編纂に従事し、明治23年上杉家記録編纂所の総裁に就任、明治41年には興讓館伝来の資料保管を目的に財団法人米沢図書館（現在の市立米沢図書館）を設立する。翌明治42年開館時の初代館長が、大正元年に米沢中学校長職を追われた松山亮（〔別表Ⅳ-3〕⑧）で、松山の離任に伴い、伊佐早は米沢図書館の第２代館長に就任し、

(25) 『続・米沢人国記（近・現代篇）』前掲Ⅲ注（108）35頁、新宮学①「伊佐早謙撰・西方君記念碑と早期の『米琉』」山形大学歴史・地理・人類学論集19号（平成30年）77頁、同②「近代山形最初の郷土史家、伊佐早謙の仕事」西村山地域史の研究36号（平成30年）2頁参照。

昭和5年6月5日死去の直前(4月)まで館長職を務めた⁽²⁶⁾。米沢藩(上杉家)・興讓館の伝統を守護する重鎮であるほか、明治26年清水彦介(天雷)・池田成章・高梨源五郎らと「直江会」を結成、大正8年には三百年祭を挙行して墓所を修復するなど、直江兼統の復権に尽力した人物である。

このような超大物が直々に乗り出してくると、米沢中学の現役教師や生徒は、手も足も出ない。同盟休校の中止と生徒不処分の裁定に対して、後輩である生徒も教師も、従わざるを得なかったし、また、彼ら有力な先輩たちの要求する校風刷新＝進学率向上＝教員更迭の圧力に対し、抗うこともできなかったのである。

(2) 学校生活

【172】我妻は、自身を他人にノートも見せない「チャッカリ秀才」で「仲間の評判は良くない」ため「級長には選ばれなかった」と述べていた(【161】)。

しかし、高橋与市は、3年次に同級となった「我妻栄君は1番で甲組の級長(特待生)、鈴木重助(【別表Ⅳ-1】④)君が副級長で6番であった」とし、5年次に聞しても、本田吉馬の証言(【169】)、と同様、「我妻栄君は相変わらず1番で特待生、甲組の級長であった。担任の先生は英語の藤本憑太郎(【別表Ⅳ-3】②③)(ヘダ)先生だった」としている(なお、浜田広介も3年甲組・5年甲組の同級生である)⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾。

また、本田吉馬は、「我妻さんは万能に秀でていた。殊に数学と英語は得意だったので、難問題がとけぬと、御宅まで、勉強に出かけたものであった」と語っている⁽²⁹⁾。本田と我妻は、中学5年間で1度も同じクラスになったことがないから、他学級の者の勉強に付き合う我妻は、決して自身が評するような「チャッカリ秀才」ではなかったように見える。

(26) その後の館長は、第3代・蘆川良輔(昭和5～10年)、第4代・西海枝信一(昭和10～13年)、第5代は市長の登坂又蔵(司書心得に市教育課長の赤井運次郎。昭和13～14年)から、第6代・赤井運次郎(昭和14～24年。【143】)と続く。

(27) 『思い出の記・高橋与市』前掲注(10)59頁、72頁。なお、62頁には「よいち〔与市〕の先生格の我妻栄君……は小学校からズーッと1番で通し、高等科1年終って中学に入学して、そして尚且つ1番だ。全課目すべてが満点と云う事だ。(よいち〔与市〕より2つも年下だ)」とある。

(28) 『思い出の記・高橋与市』前掲注(10)62頁によれば、「生徒の中に硬派と軟派とかの派閥があったらしい。我が同級生の中にも、高橋茂〔繁。【別表Ⅳ-1】⑥⑧〕君や山森亀之助〔⑮〕君達は硬派で、江辺清夫〔⑳〕君や浜田広介〔㉑〕達は軟派の一味だったとか。江辺と浜田が「軟派の一味」と目されていたのは、短歌同人のメンバーだったせいだろう(【196】)。

(29) 本田吉馬「守一無二無三」前掲I注(102)21頁。

ア 得意科目と希望進路

【173】 得意科目に関して、我妻自身は、英語については苦手意識があるが、⁽³⁰⁾ 数学その他の理系科目には自信があったようで、次のように語っている。⁽³¹⁾

① 私は数学とか物理化学というものが非常に好きだったものですから、中学校では何ということなしに自然科学のほうに行くつもりでいました。それで、中学の４年くらいまではそのつもりで物理や化学をずいぶん勉強しましたよ。……。

そんなようなわけで、物理や化学に非常に興味をもって、二部〔一高第二部（工科）〕に行くつもりだったんですが、５年生のときに計画を変更して法学部に行こうとしたのは義兄の孫田秀春の影響です。孫田秀春という人は私の家に——私の父は中学の先生をしていたものですから、中学の生徒がいつでも４、５人寄宿していましたが、孫田もその１人です。私が中学にいたころ孫田は大学の学生で法学部の独法にいたんです。男子志を立てて大学に入るなら法科でなくちゃならない、とご本人そう思っていたし、世の中でも法科万能だったんでしょうね。それが休暇のときに私の家へ来てね、私に、どうしても法科がいいんだと吹き込んだんです。それで私もいつかしらず法科へ入ろうという気持になって、中学の５年のころから勉強の方針を変えて、得意な物理や数学はあまり熱心にやらないで、語学とか歴史とかいうものに力を入れたんですよ。だから私にとっては一部〔一高第一部〕に入ることが大きな問題だったんですが、一部に入るということは法科に行くということになるので、経済学とかは眼中になかったですね。

② 私が学生時代にコツコツ勉強したのは、孫田の直接間接の激励によるものです。それは一高の入学試験の時にはじまるのです。田舎の中学を出たばかりの私が東京に来て一高の入学試験の準備をした当時、孫田は大学の４年生でした。そして、同級生の秀才連中が孫田の家に集まったんです。記憶に残っている人はたくさんありますが、法律に関係するところでは、最高裁判所の裁判官を先年おやめになった小林（俊三）さん、真野（毅）さんの２人です。……とにかく孫田の家に集まった秀才連中にいろいろ指導を受け刺激されたことが入学試験にうまくパスした大きな

(30) 我妻栄「父と子・子と父」前掲Ⅱ注(87)117頁……〔所収〕195頁。

(31) 我妻栄＝利谷信義「我妻栄先生に聞く」利谷信義＝乾昭三＝木村静子（編）『我妻栄・末川博・滝川幸辰 法律学と私』（日本評論社、昭和42年）①4-5頁、②6頁。

原因だったと思って、いまでも非常に懐かしく思っております。

なお、二男・堯も、父・栄が「わしは数学をやっていたらもっと偉くなったかもしれない」などと語るのを聞いている。⁽³²⁾

また、孫田秀春は、「彼が工科志望の受験生として出て来たのにはそれ相当の魂胆もあったことであろう。というのは、父〔又次郎〕の末弟に大瀧鼎四郎〔【86】〕という京都帝大の工科を出て京都府〔京都市〕の技師をしていた偉い工学士の人がいたのである。……〔略〕……。つまり我妻栄も工科を修めてこの叔父さんのような偉い人になりたいと思ったのは当然のことであつたろうし、また工科へでも入っていたらこの叔父さんが学資金の補助位はしてくれるかも知れないといったはかない望みを我妻父子が抱いていたのであつたかも知れない」と述べていた。⁽³³⁾

イ スキー

【174】一方、我妻は、昭和15年の「緑会雑誌」（「緑会」は東大法学部の学生団体）に寄稿した文中で、次のようにも述べている。「私が緑会雑誌に随筆を書くときはいつも『勉強の話』だった。しかし、私とて、勉強ばかりして居った男ではない。いや、私は実に多趣味な男なんです。……。スキーは郷里米沢にスキーが初めて入って来た時に中学5年生として手ほどきを受けた先覚者だ」。⁽³⁴⁾

米沢中学が体育運動の一部としてスキーを採用するのは、正しくは我妻が3年生の終わりの明治45年2月のことである。⁽³⁵⁾日本におけるスキーの発祥は、明治44年1月12日オーストラリア・ハンガリー帝国軍人テオドル・エドラー・レルヒ少佐が新潟県中頸城郡高田（現：上越市）の第13師団歩兵第58連隊の営庭で鶴見宜信大尉らスキー専修員14名に対して行った技術指導とされているから、米沢中学のスキー授業の採用は、わずか1年後のことである。

この点に関しては、高橋与市の記憶も1年ずれており――、⁽³⁶⁾

(32) 我妻堯「(講演) 米沢と我妻栄——父を語る」前掲Ⅱ注(38)『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注(32) 256-257頁……〔再録〕『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅰ注(121) 143-144頁。

(33) 孫田秀春『私の一生』前掲Ⅱ注(73) 55頁、「千代子と栄と私の貧乏物語」『追想の我妻栄』前掲Ⅱ注(73) 7-8頁……【86】参照。

(34) 我妻栄「私の趣味と娯楽」〔初出〕緑会雑誌12号（昭和15年）……〔所収〕『民法と五十年・その3——随想拾遺（下）』前掲Ⅰ注(121) 330頁。

(35) 『興譲館世紀』前掲Ⅲ注(84) 775頁。

(36) 藩校興譲館創立200年・米沢興譲館高等学校創立90年『座談会・興譲館の教育を語る』（創立記念事業実行委員会記念事業部会、昭和51年）13頁〔高橋与市〕。

スキーが中学校に入って来たのは、私が４年生〔３年生〕の時です。井熊〔幸作〕〔別表Ⅳ-3〕⁽⁴¹⁾ 先生が高田の連隊に行って習い、スキーを持って帰られた。その時スキーを５台位買って帰られたと思う。西控所の屋根の雪をおろし、屋根の上から滑って見せられた。一本杖でね。これがクリスチャニアだなんてね。転んでばかりおりましたがね。

なお、レルヒ少佐は、一本杖・二本杖の両方の技術を習得していたが、日本で指導した一本杖はブルーク滑走で用いるものなので（リリエンフェルド滑走法）、高橋の「クリスチャニア」の言も、記憶違いと思われる。

ウ 北面六畳

【175】 我妻の勉強部屋に関して、遠藤浩は次のように語っている。「先生がどこで勉強したのかよくわからないから⁽³⁸⁾、うちの母親に聞いたら、『先生はあの２階で勉強してた』と。あそこに書生たちの部屋があるんだ。先生の親父さん（我妻又次郎氏）は、米沢中学の英語の先生で、貧乏な学生や通学がたいへんな生徒を集めて、２階へおくわけですよ。だから２階に５～６人が一緒に雑居してた。『ほかの子と先生は一緒じゃないか』と言うと、『いや、当たり前だ』とうちの母親は言うんだな。何で当たり前かと言うと、先生のおやじさん、自雷様（又次郎氏の通称）は、平等がモットーだったんだ」。

米沢中学３～５年の３年間で我妻家の書生としてすごした金子安一によれば、この部屋は「北面六畳」と呼ばれていた。⁽³⁹⁾そこに我妻も含めると６人程度が寝泊まりしていたのだから、１人１畳を割り当てた勘定である。

金子によれば、この部屋は「机と本棚だけの簡素な勉強部屋である。その六畳の部屋からは多くの逸材が生れた。岸信介元内閣総理大臣もまたこの部屋で先生と机を並べたことがあるという。⁽⁴⁰⁾平貞蔵氏の兄、孫田秀春氏、高野源五郎氏などもこの

(37) 「(座談会) 遠藤浩先生を囲んで——遠藤先生の人と学問」遠藤浩先生傘寿記念『現代民法学の理論と課題』（第一法規、平成14年）792-793頁。なお、遠藤浩「我妻栄記念館」〔初出〕ジュリスト1102号（平成8年）2頁……〔所収〕『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注（32）317頁も参照。

(38) 〔七戸注〕小関薫「我妻栄記念館の開設経緯」『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注（32）314頁に、我妻の生家（現：我妻栄記念館）の平面図が掲載されている。

(39) 金子安一「北面六畳と色紙」『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注（92）38頁。

(40) 〔七戸注〕このエピソードは、おそらく我妻の次のような記憶談に由来するものと思われる。「当時、高等文官試験という役人になる国家試験があり、それを〔大学〕3年の夏に受ける

部屋出身であった」。

(ア) 平貞蔵

【176】平貞蔵の兄・貞次郎（明治35年卒）については、当時の教師が、次のような逸話を語っている。「某先生が教場で土百姓云々といったのを平貞次郎君が立腹して単身教員室に押掛けて其の先生に談判した其の口調、何方が先生か分らないやうであった⁽⁴¹⁾」。

このように中学時代は熱血的な正義漢であった貞次郎は、弁護士を目指して和仏法律学校（現：法政大学）に進学するが、弟・貞蔵によれば⁽⁴²⁾、

その兄も、頭はよく、非常な読書家ではあったが、いかんせん字が私の何倍も下手だった。あんな字を書いては、弁護士試験を受けても答案を読んでくれるひとはないだろうと思う。それで数え25歳にもなって弁護士試験に落第するようではおしまいだ、といって、パッと家に帰ってきてしまった。そのころ家にはまだいくらか田畑もあったし、ことに長男だから、気が向けば農業を手伝いながら、本ばかり読んでいた。一生その調子で、毎月、新しい印刷のにおいをかぐのがただ一つの生きがいで、と

時には、福島県の猪苗代で、岸君と私と、他に3、4人友人が一緒になってひと夏勉強しましたが、そこへ行く時に、岸君を米沢に連れて来て、鉄砲屋町の私の家に泊めて、2人でざっこ釣に行ったんですね。窪田から小其塚へ。そういう親しい仲です」。我妻栄「論理的なもの」と歴史的なもの』『我妻栄講演集・母校愛の熱弁』前掲Ⅰ注（121）16頁……〔所収〕我妻栄『民法と五十年・その3——随想拾遺（下）』前掲Ⅰ注（121）310頁。

しかし、この記述は、我妻の記憶違いでなければ、創作である。というのも、我妻が岸を連れて米沢の実家に立ち寄るのは、大正8年大学2年が終わって3年に進む夏休みであるところ、父・又次郎一家は、2年前の米沢大火（大正6年5月22日）の後に（教え子の防火活動で⑦鉄砲屋町の家は類焼を免れている）、④北寺町西ノ丁（又次郎の実家）、次いで②信夫横町（現：西大通一丁目）へと転居しており（『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注（32）『我妻栄略年譜・関連年表』336頁）、大正7年には⑦鉄砲屋町の家を「米輪」という自転車屋（姓は「大友」）に売却しているからである（遠藤浩「我妻栄記念館」前掲注（37）315-316頁。なお、土地登記簿によれば、建物敷地（地番：米沢市鉄砲屋町4134番）は大正7年10月18日我妻つる名義で所有権保存登記がされた後、同日売買を登記原因とする大友栄吉への所有権移転登記が同日付で経由されている）。それより筆者（七戸）には、大正7年10月になって⑦鉄砲屋町の家を売却した理由（売却の必要性）のほうに気がなる。

(41) 松尾捨次郎「私の米沢中学校奉職の時代」〔初出〕興譲創立50周年記念号（昭和11年）……〔所収〕『興譲館世紀』前掲Ⅲ注（84）309頁。一方、弟・貞蔵によれば、「兄貞次郎は米沢の在から米沢中学にはいったが、当時まだ士族・平民などの差別が多い時代であったにかかわらず、中学では級長になって士族出身の者たちをうんともすんともいわせないほどうまくコントロールし、将来どんなにすぐれた人物になるだろうかと期待されたということを聞いている」。『平貞蔵の生涯』前掲注（23）257頁。

(42) 『平貞蔵の生涯』前掲注（23）26-27頁。

いっていた。⁽⁴³⁾

それで家の者も失望したのだろう、祖父など「学校にはいるのはムダだから、中学なんかに行くな」と私にいう。しかし、私としてはどうしても中学に入りたい。そこで、祖父にも父にも黙って、〔明治41年〕3月、まだ雪が残る道を米沢まで28キロ、そのころだれでもそうだが、ワラジをはいて歩いて行って、門をたたいたのが、我妻又次郎先生の家だった。

米沢中学校へ入る

それはなぜかという、私の祖母のめいにあたる人が米沢に嫁に行き、我妻先生宅の筋違いほどの近所に住んでいて、兄が中学にはいり、どこに下宿するかというときに、すぐそばに我妻又次郎という中学の先生がいるから、そこに頼もう、ということで、我妻先生宅の2階に置いてもらった。それから次々に何人かの人がそこに下宿して、中学に通ったわけだが、私の兄は我妻先生夫妻からも非常にかわいがられたらしい。我妻又次郎という人は非常にできる人だったが、体が小さいため兵学校にはいれず、しばらく京都の同志社大学で英語を勉強した。しかし、それも不満で途中で辞め、東京に戻って、谷干城らの塾で塾長のようなことをやり、さらに米沢に戻って我妻家に婿に行った。この人の兄さんは、一人が有名な小学校の校長〔長兄・遠藤茂作〕、もう一人〔正しくは又次郎の次弟（三男）広瀬三作〕は染屋をやっていたが、弟さん〔四男・大瀧鼎四郎〕がこれまた秀才で、京都大学工学部の助教授から、懇望されて京都市の技師長になった人だ。お母さんも山形師範学校の第1回生で、一番年が若くて一番できたという。民法の我妻栄先生も、姉さんが二人、妹さんが一人〔二人〕いたが、とにかく家中の人が、はいった学校で全部一番という家だった。

それで私も、我妻先生の家に入れてもらって、と思って中学の試験を受けたわけだが、いよいよ中学に入学かかったところが、我妻先生の家には、すでに下宿させられているというか、監視されている連中が2、3人いて部屋もない、ということで私は中学の寄宿舎に入れられた。

その後、明治45年4月最上級学年（5年生）に進んで寄宿寮の代表に就任した彼

(43) 〔七戸注〕さらに、『平貞蔵の生涯』前掲注(23) 26-27頁には、「法政大学を出てから田舎に帰り、なにもせず本だけ読み、とうとう死んでしまった」「不幸な(?)結婚をし、子供4人を全部亡くし、生涯を終った」とある。

が画策した教師排斥の同盟休校については、すでに触れた（[171]）。このほかに、彼は、当時、次のような不満を抱いていたという。

ただ、米沢中学校にはいったことについては非常に誇りをもちながら、一方で、米沢に対して批判的な頭も少しもっていた。それは何かというと、いろいろあるけれども、一つは赤穂義士についての米沢人の態度だ。私は「義士銘銘伝」を読んで、義士の名前も全部おぼえ、大石良雄を中心によくやったものだと感嘆していたが、米沢では、吉良上野之介が藩主の父だということから、赤穂義士をほめそやすことは、当時、禁物だった。

もう一つ不満を感じたのは、せっかく上杉景勝が石田三成とともに立上って徳川を倒そうとしながら、途中でやめてしまったことだ。……。

私は石田三成びいきで、加藤清正など、いまでも「バカヤローッ」とどなりたいような気持になるほどだから、上杉が途中でおりたことについては非常な不満をもつ。そのうえ明治維新のとき、奥羽列藩同盟の中心は仙台の伊達藩と上杉藩だったけれども、また途中でさっさと方針を変えて薩長に降るようなことをした。私には、どうせやるといって立上がったら滅びるまでやったらいいではないか、という気持がある。そういう意味で私は会津が好きだし、庄内藩が好きだ。

……。

そういうことに対する不満があったから、米沢中学にはいったとき、士族の連中が大勢いたが、「おまえたち、米沢藩の士族だなんていばっているけれども、米沢藩なんてだらしがないじゃないか」という気持をずっともち続けてきた。

米沢藩（上杉家）・興讓館の伝統を奉ずる旧士族の先輩連に対して、我妻栄が抱いた感情については後述することとして、その後の平貞蔵について触れておくと、大正2年3月に米沢中学を卒業した彼は、東京で宮島大八の世話になり、翌大正

(44) [七戸注] 寛文4年(1664年)米沢藩3代藩主・上杉綱勝が26歳で嗣子なく急死したため、本来なら上杉家は無嗣子断絶となるどころ、正室・媛姫(綱勝死去の5年前に19歳で死去)の実家である会津藩初代藩主・保科正之(媛姫は正之の長女)の仲介で、綱勝の妹・富子の夫である吉良上野介義央の長男・三之助が末期養子として上杉家に迎えられ、米沢藩4代藩主・上杉綱憲となることで、上杉家の家名存続が許されたものである。こうした事情から、米沢藩は会津藩に恩義がある一方で、信夫郡と置賜郡の一部の取公による石高30万石から15万石への減少にもかかわらず、藩士の召し放ちを行わなかったことから、藩の財政は一層の窮乏を来すこととなった。

(45) 宮島大八(1867-1943)は、慶応3年10月20日米沢市猪苗代片町生まれ。宮島誠一郎〔66〕[別

3年9月京都の第三高等学校（第一部丁類〔仏法科〕）に入学するが⁽⁴⁶⁾——、

東京に帰ってきて、まる1ヵ月ぐらゐると、入学許可の通知がきた。それでまた困った。大家という人⁽⁴⁷⁾とは関係を断ってしまったし、金の出所がない。そこへまた井上〔保〕⁽⁴⁸⁾という先輩がきてくれて、米沢の有為会という会があるし、教育会というものもあって、いい学校にはいった人に学資金を貸すから、それを借りなさいという。貧乏な人がたくさんいて、志望者は多かったけれども、金が足りなければおまえ困るだろう、といて、米沢出身で鉄道院の理事などをやり、代議士になった小林源蔵⁽⁴⁹⁾という人の家に連れていかれ、三高にはいったのだが、有為会の貸費生にしてほしい、と頼んでくれた。「それじゃあ、たくさん志望者はあるけれども、一高一人、三高一人にするか」ということになって、一高は東大農学部教授をちょっとやった北村徳太郎⁽⁵⁰⁾君、三高は私の2人してくれた。前の年〔前々年〕の貸費生は1人で大熊信行さんだった。しかし、貸費生といっても、1年間せいぜい100円だから、往復の費用とか、はいったときの月謝に困る。

大正6年9月我妻榮と同期で東京帝国大学法学部（学科は政治学科）に入学した平貞蔵の受講した教授の講義に対する感想には興味深いものがあるが、内容の紹介は後の章（Ⅵ）に譲る。大学2年の大正7年12月石渡春雄・赤松克麿・宮崎龍介が

表] I ④)の二男であるが、長男夭折のため嫡男として宮島家を継ぐ。明治31年日中友好を目的に「善隣書院」を創設、中国語教育を通じて真に中国を理解する日本人の養成に努めた人物。『続・米沢人国記（近・現代篇）』前掲Ⅲ注（108）317頁。なお、『平貞蔵の生涯』前掲注（23）275頁以下、追録「詠士宮島大八先生（上）（下）」318頁以下、327頁以下も参照。

(46) 『平貞蔵の生涯』前掲注（23）53-54頁。

(47) 〔七戸注〕石川県出身の大阪の海運業者（大家商船合資会社経営者）第4代・大家七平（1865-1929）であろう。平は当初、大家に学費援助を仰ぐ予定であった。

(48) 〔七戸注〕井上保は、明治17年4月山形県西置賜郡豊田村生まれ、父は山形県会議長の井上代造。山形中学から第二高等学校を経て、明治43年10月東京帝国大学法科大学政治学科卒業。猪苗代水電株式会社入社から成業社を創立。古山省吾（編）『両羽之現代人』（両羽研究社、大正8年）82-85頁「株式会社成業社社長法学士井上保氏（山形、西置賜）」。

(49) 〔七戸注〕小林源蔵については、『両羽之現代人』前掲注（48）138-140頁「衆議院議員小林源蔵氏（山形、米沢）」、我妻榮「故小林源蔵氏を悼む」後掲【別表Ⅳ-5】④……【203】。

(50) 〔七戸注〕北村徳太郎は、明治28年1月3日生まれ。北村家は米沢藩士の家、祖父の米沢藩医・北村茂助（貞徳）の代より東京在住であるが、母が里帰りして出産したため米沢市に出生、独逸協会学校、第一高等学校から、東京帝国大学医学部に進学するも、転部して大正10年農学部農学科卒業、内務省に入省し都市計画行政に従事、戦後の昭和24年建設省退官後は、昭和26年東京農薬大学国土計画研究所教授、昭和27年東京大学農学部教授。昭和39年5月8日没、享年69歳。

結成した「新人会」に加入、大正9年卒業後は農商務省嘱託・大学院在学、その間の大正10年「社会思想社」結成（～昭和7年解散）、大正11年法政大学に奉職（～昭和8年退職）、昭和10年満州鉄道調査部、昭和13年「昭和塾」創立（～昭和16年解散）、戦後の昭和21年山形県総合開発計画委員長（～昭和23年）、昭和31年米沢市建設審議会会長（～昭和49年）、昭和36年11月3日米沢市功績章、昭和48年9月12日米沢市名誉市民（昭和29年伊東忠太・昭和39年我妻栄に続く3番目の授与者）。昭和53年5月28日脳血栓にて死去、享年84歳。

（イ）高野源五郎

【177】前記（【175】）金子安一の文章で、平貞次郎・孫田秀春とともに我妻家の書生として名が挙がっている高野源五郎についても触れておこう。

彼の前名は高野吉太郎。高野家は、曾祖父・源吾の代までは農業の傍ら醤油販売を営んでいたが、源吾の長男・吉太郎（万延元年12月〔1861年1月〕生まれ、明治12年家督相続の際に源五郎〔初代〕に改名）が田地を担保とする貸金業によって財を築き、株式会社高野銀行を創業、米沢屈指の資産家で高額納税者となった。一方、源吾の二男・吉次郎（明治4年2月生まれ）は、明治40年兄の初代・源五郎の養子となり昭和8年家督を相続して2代・源五郎を襲名、この2代・源五郎の長男が、我妻家の書生となった高野吉太郎（後に3代・源五郎を襲名）で、彼は明治29年4月生まれであるから、小学校は我妻と同学年であるところ、米沢中学卒業は、我妻より2年遅れの⁽⁵¹⁾大正5年3月であり、しかも、成績は同年の卒業生75人中最下位である⁽⁵²⁾。おそらく彼は、成績不良のため家で持て余した挙げ句、我妻又次郎方に「下宿させられているというか、監視されている連中」（平【176】）の一人だったのだろう。

しかし、そのような連中の「監視」役として、狭隘な「北面六畳」に彼らと一緒に詰め込まれて勉強した我妻は、内心どのような感情を抱いていただろうか。「自分ばかり勉強して、他の奴には何も教えてやらない」「チャッカリ秀才」だったと我妻が中学時代を振り替えるとき（【161】）、彼は「北面六畳」の同室者たちとの関

(51) 『人事興信録（第11版・下）』（人事興信所、昭和12年）タ173頁、『同（第12版・下）』（昭和15年）タ140頁、『同（第13版・下）』（昭和16年）タ127頁、『同（第14版・下）』（昭和18年）タ124頁。なお、彼の弟・源次郎（明治33年7月生まれ）が、早稲田大学に進学したのに対して、彼が上級学校に進学した記録は発見できない。

(52) 『創立満20年記念・山形県立米沢中学校一覧』（大正5年9月）前掲Ⅲ注（84）171頁。

係を（後の一高の寮生活との対比において）思い浮かべていたようにも推測される。

（３） 八人会

【178】 高橋与市は、「氏〔我妻榮〕は特に友情に厚く、東大在学の中学同級の八人会は兄弟の如く、終戦後は母校興譲館同級の会『雨声会』の中心人物となり一同を引付け、今日までなごやかだった」と語る。終戦後の「雨声会」については後に述べることとして（→（４））、東大在学の「八人会」についていえば、高等学校に進学した９名（一高３名・二高６名）の進路は〔別表Ⅳ-４〕の通りであって（①……は〔別表Ⅳ-１〕掲記の中学卒業時の席次）、二高進学者のうち、⁽⁵³⁾⑦倉石槐三は京大、⁽⁵⁴⁾⑨太田孝市は東北大に進んでいるので、東大進学者は７人しかいない。

ところが、この点に関する高橋与市の記憶は大いに曖昧で、彼の回顧録には次のよう⁽⁵⁵⁾にある。

〔大正10年〕５月半頃だった。吾々中学時代の同級生八人会で休日を利用、箱根抜〔跋〕渉の議が纏り、その実行（決行）が実現した。

八人会は我妻榮、倉石槐三、高橋恒次郎、外田麟造、庄田次郎、江辺清夫と自分（東大在学中の者）で、打揃って新橋発、小田原まで汽車で、後は徒歩で、箱根に入り先ず早雲山に祖母を早雲館に尋ねて、御昼を御馳走になった。小憩して芦の湖を眺め、富士の遠景に見取れながら、箱根を抜〔跋〕渉越えて（写真あり）三島に下った。

夕方早々に小さな肉屋に上って咽喉の渴きを癒やし、空腹と疲れをビールとすき焼鍋で楽しく２時間ばかり過し、いゝ気分で汽車にゆられ新橋まで。自分は酒に強い自信はあったが、ビールは経験薄かったのか、ひどく酔った様で、この汽車の中は眠ってしまった。『ビールに弱いアンチャン』とあだ名を取ったのはこの時以来だ。

……。７月末鈴木重助君に誘われて富士登山をした。……。

９月頃だった。この八人会の内２人（我妻君と江辺君）は早くも東大法科卒業となる。そして学制改革により、他の３人（鈴木重助君、高橋恒次郎、倉石槐三君）は明年４月には卒業と云う事になっているので、これ等の送別と祝賀の会をやる事になっ

(53) 高橋与市「雨声会」『追想の我妻榮——険しく遠い道』前掲Ⅰ注（63）27頁。

(54) なお、⑨太田孝市に関しては、『東北帝国大学一覽（自大正9至10年）』（東北帝国大学、大正10年）の在籍者名簿に名前はあるが（414頁）、『（大正11至12年）』（大正11年）以降に記載がない。退学あるいは逝去したのか。

(55) 『思い出の記・高橋与市』前掲注（10）50-51頁。

【別表Ⅳ-4】 大正3年3月卒業・高等学校進学者（9名）の進路

席次	氏名	高校	学科	入学	卒業	大学	学科	入学	卒業
①	我妻栄	一高	第一部四之組	大正3	大正6	東大	法・法律学科独法科	大正6	大正9
⑭	高橋恒次郎	一高	第一部五之組	大正3	大正6	東大	法・法律学科仏法科	大正7	大正10
④	鈴木重助	一高	第一部五之組	大正4	大正7	東大	経・経済学科	大正8	大正11
⑳	江辺清夫	二高	第一部甲組	大正3	大正6	東大	法・法律学科英法科	大正6	大正9
⑦	倉石槐三	二高	第一部甲組	大正4	大正7	京大	法・政治学科	大正7	大正10
⑯	外田麟造	二高	第三部	大正4	大正7	東大	医・医学科	大正7	大正11
⑬	庄田次郎	二高	第一部甲組	大正5	大正8	東大	経・経済学科	大正8	大正11
⑫	高橋与市	二高	第三部甲組	大正5	大正8	東大	医・医学科	大正8	大正12
⑨	太田孝市	二高	第三部乙組	大正5	大正9	東北大	医	大正9	-

た。

養助〔東京・赤坂葵橋（溜池）の皮膚科泌尿器科医・高橋養助〕叔父上の御世話で赤坂の料亭春都（叔父上の御得意の亭）を紹介された。全て叔父上のおはからいにまかせた。

御酌に出て来た女性は何れも、今年小学校を卒業したとかの者3人ばかり、誠に綺麗な小さな桃割れに赤いカンザシ姿の子供達だ。我々会員大喜び、唱歌を歌ったり、ふざけ、飲み散らして楽しく一夜を過した。而も叔父上の御厚意で、吾々一同無会費で済したので一同大いに恐縮したことを記憶している。（この場面の写真一葉ある筈）

しかし、我妻栄と江辺清夫の大学卒業は、前年の大正9年7月である。一方、京大に進学した倉石槐三が、大正9年の旅行や宴会に参加するためには、大学の講義を休む必要がある。

ア 米沢中学の三秀才

【179】 ともあれ、彼ら同級生中の学歴エリートは、明治45年～大正2年（中学4年～5年）の校風刷新＝進学率向上運動の直撃を受けた者たちであるが、では、この運動を展開した興譲館の先輩たちの実績はどうであったかといえば、米沢中学の歴代の秀才に関して、我妻は、次のように述べている。⁽⁵⁶⁾

北沢先輩とは、7年か、8年違うんで、私が旧制中学に入った時には、もう卒業して第一高等学校の生徒で、我々の憧れの的だったのです。その当時、お医者さんになられた矢尾板誠策さん、海軍の方へお入りになりました小林仁さん、そして北沢敬二郎さんを三秀才と申しました。北沢さんは、東京大学法学部を目指していましたから、将来法学部へ行こうとする者にとっては、まさに憧れの的だったわけです。もっとも、その後に、私も加わって四秀才となったらしいんです。

この言は、昭和41年9月12日興譲館高校創立80周年記念式典の講演の冒頭に発せられた言葉で、当時同校の教諭であった松野良寅は「自己PR的な話もされるので、当初は多少嫌みを感じた」と述懐しているが、我妻の主観的な意図としては、直前に講演を行った大先輩の北沢敬二郎を立てる一方で、自分の講演に対しても生徒の関心を惹きつけようと考えたのだろう。

（ア） 矢尾板誠策

【180】「三秀才」の最年長である矢尾板誠策（1885-1965）は、米沢藩士族・三段崎さだがさき景德・小夜夫婦の三男として明治18年2月24日米沢市館山片町に生まれ、館山尋常高等小学校から明治30年米沢中学に進み、翌明治31年米沢藩医の矢尾板家の養子となった。⁽⁵⁸⁾我妻栄記念館・矢尾板操館長の祖父である。

中学時代の各学年の成績は不明であるが、明治35年3月（第10回卒業生）首席卒業後は、同年9月第二高等学校に進学（1学年上に金田一京助がいた）、明治38年東京帝国大学医科大学医学科入学、明治42年卒業後は大学院に進み（内科学一般）、大学病院・入沢達吉内科に入局、その後は、大正元年日本橋の北村胃腸病院副院長、大正7年院長、大正10年医学博士、大正12年関東大震災により全焼した北村胃腸病院跡に矢尾板胃腸病院を開業、昭和9年吉田清太郎牧師により受洗、昭和21年米沢に矢尾板診療所を開業、昭和40年5月29日帰天、行年80歳。

(56) 我妻栄「地方の高校生の責任」前掲注（6）42頁……〔所収〕288頁。

(57) 松野良寅「米沢の精神風土と我妻栄先生」前掲注（3）188頁。

(58) なお、長兄の三段崎景之は、米沢中学から東京高等商業学校卒業、四日市商業学校教授、三井物産を経て、海軍主計中監、退役後は高津螺旋盤製作所社長。次兄の三段崎誠吉は、伯父の伊藤家の養子となり、明治34年7月京都帝国大学工科大学卒業後は、築港関係の土木技師となった。古山省吾（編）『両羽の現代人』前掲注（48）42-45頁「北村胃腸病院院長矢尾板誠策氏（山形、米沢）」、矢尾板広吉（編）『矢尾板誠策遺稿——罪について』（矢尾板広吉、平成4年）。

(イ) 北沢敬二郎

【181】 我妻の前に記念講演を行った北沢敬二郎(1889-1970)は、明治22年5月28日丸山篤二郎・スエ夫婦(米沢藩士の家)の二男として米沢市龍言寺町に生まれ、中学2年で北沢虎蔵の養子となる。小林源蔵の甥である。

中学時代は首席で通し、明治40年3月首席卒業後は、同年9月一高に進学、第一部二之組(39名)の入学時の席次は、1位三谷隆正、2位森戸辰男に対し、北沢は11位、明治43年7月卒業時の席次は、英法科志望73名中、2位三谷隆正、3位森戸辰男、5位南原繁、6位真野毅に対して、北沢は12位、東京帝国大学法科大学政治学科入学時には、当時小石川表町の伝通院裏にできた米沢興譲館の寄宿舎に入り「有為会雑誌」の編集に携わる。1年修了時の席次は、首席・南原繁に対し、北沢17位。

大正3年卒業後は、住友総本店に入社。戦後の昭和21年財閥解体で理事を辞任、翌昭和22年公職追放となるが、昭和25年大丸社長に就任、昭和29年大丸東京駅八重洲口店開店を成功させ、昭和38年会長、興譲館高校での講演から4年後の昭和45年10月25日退社する車中で急性心不全のため死去、享年81歳⁽⁵⁹⁾。

(ウ) 小林仁

【182】 小林仁^{まさし}(1890-1977)は、明治23年6月18日米沢市の農業兼織物業・小林精造の長男に生まれた。『興譲館世紀』『興譲館小史』には、米沢中学校「明治41年卒」とあるが、しかし、『米沢中学校一覽』⁽⁶⁰⁾の卒業生名簿には名前がない。彼は海軍兵学校38期であるところ、海兵38期の入学年月日は明治40年9月21日なので、明治40年4年を終えた時点で中途退学したものである⁽⁶¹⁾。にもかかわらず、彼を米沢中学

(59) 『私の履歴書(第27集)』(日本経済新聞社、昭和45年)7頁、『北沢敬二郎氏を偲ぶ』(大丸、昭和46年)、『興譲館世紀』前掲Ⅲ注(84)326頁、松野良寅(編)『興譲館小史・人あまたあと継ぎて』(米沢興譲館出版会・興譲館叢書第1集、昭和63年)107頁、松野良寅『先人の世紀——上杉鷹山公と郷土の先人(後編)』(上杉鷹山公と郷土の先人を顕彰する会、平成2年)53頁。

(60) 『興譲館世紀』前掲Ⅲ注(84)326頁、『興譲館小史』前掲注(59)107頁。

(61) なお、『続・米沢人国記(近・現代篇)』前掲Ⅲ注(108)156頁は、中学「4年修了で海軍兵学校に合格、明治40年9月入校」とするが、海軍兵学校の入学資格は「年齢満16年以上満20年以下」の年齢制限のみであって、学歴は問わない(明治30年9月24日勅令第327号「海軍兵学校条例」15条、大正7年8月15日勅令第318号「海軍兵学校令」16条も同様)。

一方、高等学校の入学資格については、明治27年7月12日文部省令第16号「高等学校修業年限及入学程度」2条では「尋常中学校卒業ノ程度」とされ、明治44年7月31日勅令第217号「高等中学校令」5条では「中学校ヲ卒業シタル者又ハ年齢16年以上ニシテト同等ノ学力アリト

の「三秀才」の一人に挙げるということは、１年から４年までの成績が、よほど良かったのであろうが、「三秀才」のいずれに関しても、我妻と異なり、各学年の平均点を明らかにした資料が示されていない。当時の学籍簿が、現在の米沢興譲館高校に保存されているのであれば、（我妻栄や浜田広介らの成績も含めて）是非とも確認してみたいところではある。

なお、小林の海兵38期入学時の成績は150名中26位、卒業時（明治43年7月18日卒業）の成績は⁽⁶²⁾149名中4位。

一方、米沢中学で小林より3学年上の南雲忠一（1887-1944：明治38年第13回卒業生。卒業時の席次は5位、8位に孫田秀春）の海軍兵学校（36期）明治38年入学時の席次は70位、明治41年卒業時の席次は7位であるが、南雲の同期には、海軍始まって以来の秀才と謳われた佐藤市郎（1889-1958：岸信介・佐藤栄作の長兄）がおり、彼は海兵首席入学、在校中の成績はほぼ満点で（平均97.5点）首席卒業、しかもノートを取ったこともないという伝説まであるから、南雲忠一はもちろん小林仁も太刀打ちできる相手ではない。その後、南雲は、海軍大学校甲種18期生（大正7-9年）卒業時の席次2位であったが、同期の佐藤は当然に首席。しかし、彼は、弟・岸信介と同様、反骨とシニシズムの同居する複雑な人物であり、昭和5年ロンドン海軍軍縮条約締結をめぐる海軍内部の条約派（軍政派）と艦隊派（統帥派）の派閥抗争が原因で出世街道から外れ、昭和13年中将・旅順要港部司令官を最後に、昭和15年予備役となり、その後は読書と海軍史研究に沈潜して、昭和33年4月12日心筋梗塞で死去した。⁽⁶³⁾享年68歳。

これに対して、南雲忠一は、昭和14年中将、昭和16年第1航空艦隊（第1機動部隊）司令長官となって真珠湾奇襲に成功するが、昭和17年ミッドウェー海戦で大敗した後、昭和19年中部太平洋方面艦隊司令長官兼第14航空艦隊司令長官を命ぜられ、7

検定セラレタル者」とされていた。これに対して、いわゆる「四修」の制度が導入されるのは、我妻が大学2年の大正7年12月6日勅令第389号「高等学校令」においてである（12条「高等学校高等科ニ入学スルコトヲ得ル者ハ当該学校予科ヲ修了シタル者、中学校第4学年ヲ修了シタル者又ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ学力アリト認メラレタル者トス」）。

(62) 秦郁彦（編）『日本陸海軍総合事典（第2版）』（東京大学出版会、平成17年）285頁。

(63) 『日本陸海軍総合事典（第2版）』前掲注（62）211頁、284頁。評伝に、佐藤多満＝佐藤信太郎（編）『佐藤市郎——軍縮会議回想録・その生涯』（佐藤多満、平成3年）。

月6日サイパン玉砕でジャングルにて拳銃自決した⁽⁶⁴⁾。

一方、米沢中学「三秀才」の一人・小林仁は、昭和16年中将、昭和18年第4艦隊司令長官となるも、昭和19年2月米軍によるトラック島空襲の大損害（海軍丁事件）の責任を問われて更迭、5月退役に追い込まれたうえ、戦後には長官解任後の捕虜虐待事件の責任まで負わされて、昭和22年東京裁判で懲役15年を言い渡され、巢鴨プリズンに収監された。昭和27年日米講和条約により仮出所、昭和52年8月7日直腸癌のため死去、享年87歳⁽⁶⁵⁾。

イ 八人会の仲間たち

【183】 全国各県・各地方の郷土愛は、今日においても、しばしば他県・他地方との間の競争意識を引き起こす。他県・他地方に対して優越性を誇示できるのは、数値化による評価が可能な分野に限られるが（これに対して、たとえば「敬師の系譜」といった数値化による比較対照に馴染まない領域に関しては、神格化された長州の吉田松陰・松下村塾の系譜に、何人も対抗できない）、米沢に関して特徴的に感じられる点は、海軍の将官の数を、郷土愛を鼓舞する手段に用いている点で、たとえば「米沢海軍」出身の松野良寅は、次のように述べている⁽⁶⁶⁾。

小林仁中将が〔海軍兵学校に〕入られた年〔明治40年〕は、150名中山形県から9名入っておりますが、そのうち米沢中学が4名（鶴岡中学4名、その他1名）だったそうです。その9名が兵学校内を「ざまみろ」と闊歩したそうです。

山下〔源太郎。【168】参照〕大将が軍艦「磐手」の艦長時代〔明治39年〕、たまたま鹿児島湾に行ったそうですが、上陸して接待をうけたとき、「どうした、薩摩の海軍さっぱり兵学校に来ないじゃないか」といって薩摩の連中にハッパをかけられたそうです。

だが、これに対して、高等学校への進学者数についていえば、興譲館の先輩たちは、他県の中学との競争を意識していない（一高への進学者数に関していえば、米沢

(64) 『続・米沢人国記（近・現代篇）』前掲Ⅲ注（108）275頁、『興譲館小史』前掲注（59）60頁、松野良寅『海は白髪なれど——奥羽の海軍』（博文館新社、平成4年）138頁。

(65) 『日本陸海軍総合事典（第2版）』前掲注（62）207頁。なお、『続・米沢人国記（近・現代篇）』前掲Ⅲ注（108）157頁、松野良寅『海は白髪なれど』前掲注（64）68頁、259頁には、小林仁『海軍勤務回想』（出版社、出版年不明）の挙示があるが、現物を確認できなかった。

(66) 『座談会・興譲館の教育を語る』前掲注（36）10-11頁〔松野良寅〕。

中学は、岸信介の岡山中学→山口中学や、金田一他人の盛岡中学に勝ったことはない）。先輩たちが問題としたのは、もっぱら米沢の内部における、武官（とりわけ海軍の将官）と比較した場合の、文官系出世コースの進学者数であった。

（ア）我妻栄

【184】我妻栄は、前述（【179】昭和41年興譲館高校創立80周年の講演で、10年前に東大生向けに書いた文章を読み上げている。原典を引用すれば⁽⁶⁷⁾——、⁽⁶⁸⁾——、

私は、山形県米沢市という田舎の中学を出た。この中学は、上杉鷹山公の遺徳の一を伝える優秀なものだなどといわれたのは、昔のことで、私の卒業する頃の成績は、いっこうかンばしくなかった。私の卒業する前々年の卒業生から、久しぶりで二人一高に入学した。それに気をよくして、前の年には、選り抜きの俊秀が十数人受験したが、無惨にも全滅、一人の入学者もなかった。私は、5年間首席で通し、卒業の成績は平均96点7分という空前のレコードだったので、先生たちも、これなら一高の難関も突破するだろう、と望みをかけた。殊に、私の父は、この中学で英語の先生をしていたので、息子が失敗するようなことがあっては申し訳ない、と苦慮していた。こうして、いわば郷里の希望と父の祈願を負わされて上京した私は、ほんとうに、入学試験に失敗したら郷里には帰れないと思いつめるほど、悲壮な気持ちをもっていた。

もともと親思いの孝行息子で、よい成績をとって親を喜ばせたいとの一念から勉強を続けてきた我妻は、父親が教師を務める中学校に入ったばかりに、親の体面を汚さぬよう優等の成績をとり続けることを余儀なくされたうえ、その勉強の成果がかえって仇となって、興譲館の先輩たちの校風刷新＝進学率向上の圧力に応える役回りを、一身に背負い込む羽目に陥ったのである。

【185】そもそも一高の入学者は、金田一他人や岸信介をはじめ、全国各地の中学校の首席卒業生ばかりである。しかし、金田一や岸の中学時代には、我妻のような悲壮感は、みじんも認められない。

① 金田一他人——彼が在籍した頃の盛岡中学については、同級生の宮沢賢治に

(67) 我妻栄「地方の高校生への責任」前掲注（６）43-45頁……〔所収〕290頁。

(68) 我妻栄「試験勉強の話」〔初出〕法相5号（東京大学法律相談部、昭和31年）……〔所収〕①『民法と五十年・その3——随想拾遺（下）』前掲I注（121）226-227頁、②我妻栄（著）・遠藤浩＝川井健（補訂）『民法案内1私法の道しるべ』（勁草書房、平成17年）〔附録〕私の試験勉強」228頁。

関する詳細な資料が存在しており、賢治の記した文章中にも、後年になって学校時代の出来事を編年体にメモした『『東京』ノート』の「盛中1年2学キ」（明治42年9月1日～12月22日）の項に「金田一ナグラレ／サウニナル」との記述がある⁽⁶⁹⁾。

一方、金田一京助は、賢治について、「中学時代、私の4番目の弟〔他人〕が同級で、いま一人同じ花巻の名門の瀬川〔貞蔵〕さんと、3人で腕をくんでとった写真がありましたので、かなりお親しくしていたことが、わかっておりました」と記している⁽⁷⁰⁾。もっとも、賢治は、同じ花巻出身でも、阿部孝と親しく、瀬川貞蔵は、賢治よりも、金田一他人と親しかった。この交友関係の違いについては、「スポーツより文学を好んだ賢治に対し貞蔵は当時流行しはじめた野球に夢中であったようで、その点で肌合いが違っていたからであろうか」と推測されている⁽⁷¹⁾。中学5年間首席を通した金田一は、級長として5年生の春季運動会（大正2年5月14日）では全体を統括する庶務係長を務め、秋の発火演習（同年9月25-26日）では攻撃側の南軍第一中隊長として指揮を執っており、彼の死後に本荘可宗が記しているような⁽⁷²⁾、線の細い印象は感じられない。大正3年3月23日の卒業式で首席として卒業⁽⁷³⁾

(69) 『【新】校本・宮沢賢治全集・第13巻（下）ノート・メモ（本文篇）』（筑摩書房、平成9年）『『東京』ノート』173頁。金田一が級友から殴られそうになった理由について、小川達雄①『盛岡中学生・宮沢賢治』（河出書房新社、平成16年）257頁、②『隣に居た天才——盛岡中学生・宮沢賢治』（河出書房新社、平成17年）30頁は、論壇風発の金田一の多弁が引き起こした舌禍事件としている。

(70) 金田一京助「啄木と賢治」『金田一京助随筆選集2 思い出の人々』（三省堂、昭和39年）198頁。

(71) 宮沢賢治の文学的出発は、中学時代の短歌作りに始まるが、明治44年1月（賢治：中学2年）の作品には――、

這ひ松の
なだらを行きて
息吐ける
阿部のたかしは
がま仙に肖る

――との歌がある（『【新】校本・宮沢賢治全集・第1巻・短歌・短唱（本文編）』（筑摩書房、平成8年）102頁）。分かち書きや、実名の歌い込みなど、石川啄木（前年12月に東雲堂書店から『一握の砂』を刊行）の影響がうかがわれる。中村稔『宮沢賢治ふたび』（思潮社、平成6年）12頁。

(72) 瀬川恭子「(エッセイ) 賢治と貞蔵——大正7年5月10日付賢治より貞蔵への書簡」宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報26号（平成15年）21頁。

(73) 藻岩豊平〔本荘可宗〕「現代文明の犠牲者・大正の藤村操／帝大秀才金田一他人の自殺」婦人公論6巻3号（大正10年3月号）「趣味」5頁「金田一他人は盛岡中学校の秀才であった。彼の中学時代の同窓は、彼が豪宕磊落な、気牛を呑む底の腹の太い少年では決して無かったこと、けれども甚だ性質の好い、心持の善良な少年であったこと、及び学術に於いては抜群の成績で

生総代を務めた金田一他人を筆頭に、一高に進学した同級生は、賢治の親友・阿部孝ら計5名である。⁽⁷⁴⁾

ところで、盛岡中学は生徒の騒擾が頻発する学校で、古くは明治35年には石川啄木らによる教師排斥の同盟休校があり、金田一他人や宮沢賢治が3年生の明治44年11月にも、教師と衝突した生徒の退学処分に抗議する同盟休校があり、また、彼らが4年生の大正2年1月には、寄宿舎の舎監排斥運動の結果、賢治や阿部孝ら4年・5年の寮生全員が退寮処分となった。⁽⁷⁵⁾しかし、米沢中学のような、先輩らの主導による校風刷新=教師排斥運動は発生していない。

② 岸信介——彼の中学時代の成績は、岡山中学時代は学年10番内外であったが、明治44年5月（3年1学期）山口中学に転校した後は、5年の2学期に澄川道男（1896-1977：大正3-6年海兵45期、昭和3-5年海大甲種28期、海軍少将）に首席を奪われ2番になった以外、首席で通した。⁽⁷⁶⁾

あったことを証言するには一致してみた。その外の小さいことに至っては人々によって好悪の感情からして、種々に云はれてみたけれども、兎に角、彼の中学時代は甚だ善良に、また優等生として其未来を祝福されてみたのであった。秋の月夜には自宅の縁側に腰かけて、ほのぼのの薄の穂に出る満月を待ちながら、聞き覚えの一高寮歌などを口笛したといふ、何の思ひ煩ひも無いものであった。けれど猶一步深く考へると彼の心の奥底に温められなかった寂寥が淡く広がってゐたのであった。

(74) 同期85名中、①首席の金田一他人は第一部丙類（独法科）、②2位の阿部孝は第一部乙類（英文科）、③久慈学と④中館武左衛門は第一部丁類（仏法科）、⑤沢田〔藤田〕藤一郎は第三部（医科）に現役合格した。宮沢賢治の短歌「友だちの／入学試験ちかからん／林は百合の嫩芽萌えつ、」⁽⁷⁵⁾〔【新】校本・宮沢賢治全集・第1巻：短歌・短唱（本文篇）〕前掲注（71）23頁の「友だち」とは、一高受験を控えた②阿部孝と⑤沢田藤一郎を指している（小川達雄・前掲注（69）②168頁）。

②阿部孝は、一高から東京帝大文学部英文科卒業後、旧制高知高校教授となり、戦後は高知大学学長に就任した。専門の英国演劇のほか、エッセイストとしても知られる（『隨筆・甘口辛口』（同学社、昭和31年）、『隨筆・ばら色のばら』（高知新聞社、昭和40年）〔日本エッセイストクラブ受賞作〕など）。

③久慈学は、一高から東京帝大法学部法律学科仏法科卒業後、内務省に入り、戦時下の昭和17年3月陸軍司政長官に任ぜられた。一高時代①金田一他人と最も親しかった友人である。

④中館武左衛門は、一高から京都市大法科大学法律学科に進んだ。赤司卓治（〔47〕①）と同様の進路であるが、しかし大正7年度以降在籍者名簿から名前が消えている。その後の職業等は未調査であるが、賢治の晩年（昭和8年9月21日死去）まで書簡の遣り取りのあった人物である。

⑤沢田藤一郎の進学先は、九州帝大医科大学で、九大の副手から昭和6年助教授、大正13年台北帝大教授を経て、昭和18年九大医学部第三内科講座教授。戦後になって歌作を始めるが、『沢田藤一郎歌集（第4集）』（沢田藤一郎、昭和54年）184頁には「中学の同級生の賢治君あの頃すでに歌作りをりき」の歌がある。

(75) 『白聖校九十年史』前掲Ⅲ注（85）148頁、『白聖校百年史・通史』前掲Ⅲ注（85）260頁。

(76) 岸信介・前掲Ⅲ注（133）①『我が青春』144頁、166頁、②『私の履歴書』41頁。

同期の中安閑一（1895-1984：卒業後は東京高等工業学校機械科（現：東京工業大学工学部）に進学、宇部興産社長）によれば、「成績は1番が岸君（彼は弁論部の部長をやり、あまり勉強をしたふうはなかったが、なぜいつも抜群であった）、2番は海軍大学へ行って少将まで進んだ澄川道男君。3番が吉田〔義人、旧姓・難波。⁽⁷⁷⁾一高から京大法・政治学科、新三菱重工社長〕君、4番が貞永〔敬甫。三高から東大法・英法科、東洋曹達社長〕といった具合で、私は7、8番程度だった⁽⁷⁸⁾、「彼はズバぬけて頭のいい男だった。およそ試験勉強などしたことがない。試験シーズンになると、私はあわててガリ勉するが、彼は絶対に勉強しない。いい気持で遊んでばかりいる。ところが、岸君はいつも一番なのである。いわゆる天才なのかもしれない⁽⁷⁹⁾」。一方、成績2位の澄川道男によれば、「佐藤信介はガリ勉じゃなかったね。楽にやっていたと思うが、ようできた。私は家があり豊かではなかったし環境もそれほどよくはなかったが、やはりガリ勉のほうだったね。しかし吉田〔祥朔〕先生の下宿していた⁽⁸⁰⁾から、かれは有利だったと思う」。

岸が3年に転入した当初、山口中学教師である叔父・吉田祥朔の家には、5年生の山本芳徳（→六高→京大法・政治経済学科）と兄部謙輔（→一高→東大法・政治学科）が下宿していたため、岸は、吉田叔父の監督下にあった4年生の吉武秀人（→陸軍士官学校27期。陸軍少将）の下宿している近所の家に入り、明治45年卒業した山本・兄部と入れ替わりに吉武と吉田叔父宅に移った（その後、陸士に進んだ吉武と交替で同室者となった貞永敬甫も他へ移り、寄宿人は岸一人となる）。通学先の高校の教師の

(77) 難波作之進（防長農工銀行取締役・代議士）の三男。四男・難波大助が大正12年虎の門事件を起こし死刑に処せられたためであろう、長男・正太郎（大正5年東大法・英法科卒。【186】）と五男・健亮（昭和2年京大経卒）は、作之進の弟・黒川本蔵の家籍に入り、三男・義人は吉田駒三郎の長女・登代の婿養子となった。

(78) 中安閑一『私の履歴書（第33集）』（日本経済新聞社、昭和43年）142頁……〔単行本〕『私の履歴書』（宇部興産、昭和43年）21-22頁、中安閑一伝編集委員会（編）『中安閑一伝』（宇部興産、昭和59年）16頁。岸信介と澄川道男は「4年生のときには2人とも特待生となった。卒業の年次にはどちらも平均94点前後で、3番は90点だからずっとひらきがある。卒業式の答辞は岸信介が読み、県知事の銀時計は澄川に渡されたが、2人の生徒が答辞と銀時計を分け合うのは山口中学はじまって以来のことといわれたものである」。岩川隆『巨魁・岸信介研究』（ちくま文庫、平成18年）35頁。

(79) 『歴史をつくる人々11』無念無想——宇部興産社長・中安閑一（ダイヤモンド社、昭和40年）114頁。

(80) 岩川隆・前掲注（78）34頁。

家に世話になっている点で、置かれている環境は我妻と似ており、しかも吉田叔父は、きわめて厳格で口やかましい人物であったが、しかし、岸は、我妻のような従順さはまったく持ち合わせておらず、夜間外出厳禁の家を抜け出しては級友の下宿にたむろし、そこで煙草を覚え、麦酒を飲んだりしたという。⁽⁸¹⁾すこぶる素行不良の生徒であったが、彼の「ソツのなさ」は、この年代からいかなく発揮されており、岸より1学年下の前田勲は、次のように回想している。⁽⁸²⁾

岸信介元首相（20期）は私より1年上であったが、「上堅グループ」の客員であったし、キャップ的存在であった。彼は叔父さんにあたる吉田祥朔先生（綽名をケイレン）の家に寄宿していた。先生は、この地区の校外指導⁽⁸³⁾の担任であったので、よく私たちの下宿を巡回されたものだ。予告なしの不意打ちであったが、彼のす早い進んでわがグループは、100%ことなきを得ておかげで素行は揃って甲であった。彼は学校をサボることもおしえてくれた。その頃は「サボル」と言わず「カーブ」を出すと言っていた。

もっとも、吉田祥朔叔父にあっても、このような岸の行状に気づいていたふしもあり、岸と同級の原田隆一は、次のように語っている。⁽⁸⁴⁾

かれ〔原田〕の校外監督がたまたま吉田先生であったが、某日、

「きみは日頃、だれと交際しているのか」

とたずねられた。原田が正直に、

「佐藤（当時はまだ佐藤信介）です」

とこたえたと

「あれと遊んでいたら落第するぞ」

と忠告した。そういわれても仕方がないほど信介は勉強しない。原田がみるところ、

(81) 岸信介・前掲Ⅲ注(133)①『我が青春』156頁。

(82) 『山口県立山口高等学校百年史』（山口県立山口高等学校95周年記念事業会、昭和47年）277-278頁。

(83) 〔七戸注〕山口中学校「生徒通学規程」（明治32年制定→明治37年改正）2条は6つの「通学生監督区域」を設け、3条で「通学生ハ該区担当監督教員ノ指揮命令ニ服従スヘキハ勿論……」と規定する（『山口県立山口高等学校百年史』前掲注(82)182-183頁）。なお、このような校外監督の制度は、同時期に全国各地の中学校に設置されていたようで、米沢中学でも、明治35年「2月26日校内監督・校外監督を置き職員に分担せしめた。校外の方は東西南北中の5部に分けた」（『沿革史』前掲注(19)101頁）。

(84) 岩川隆・前掲注(78)33-34頁。

毎朝起きて予習と復習はやっているらしいのだが、ほとんど勉強しなくても成績は抜群という秀才型の人間であった。

なお、岸は、「中学時代は運動らしい運動をやらなかった⁽⁸⁵⁾」。また、「中学時代余り読書家ではなかった。中学時代に纏まって読んだ記憶のあるものは、長井〔有年。山口中学の漢文教師〕先生の処で読んだ『孟子』の外、『十八史略』『日本外史』等の漢文であった。雑誌は『学生』と言う中学生向きのものが主で、大町桂月の漢文口調の論文が頭に残って居た。又『武侠世界』と言う雑誌が押川春浪の主幹の下に出て居り、これも愛読した。徳富蘇峰先生の『静思余録』も印象に残って居る。その他の小説類は殆ど読んだことがなかった。同級生の中には小説を耽読し、又『中央公論』や『太陽』などと言う高級なものを読んで居た者もあったようであるが、私にはまだそう言うものに興味がなかった⁽⁸⁶⁾。「私は当時の読書の上から見ても極めて平凡で、所謂文学青少年に入る資格は全然なかった。それなのにどうしたはずみであったか、貞永〔敬甫〕君や笹木〔高一〕君など数人の友達と図って回覧誌をこしらえたことがあった。3号位出して止めて了った。毎号論文を書いたようであるが、その上小説の様なものを書き、俳句に似た様なものを作って載せた記憶もある⁽⁸⁷⁾」。

その後、高校受験を翌年に控えた「中学の5年の時は種々の受験準備書を片っぱしから暗記するのに忙しかった。南日の英文和訳、和文英訳の両書⁽⁸⁸⁾の如きは最も力を入れたものであった。又山口高商の先生であった奈倉次郎という人の評解の付せられた英文叢書⁽⁸⁹⁾があって赤い表紙のポケットに入る小型のものであった⁽⁹⁰⁾」。

【186】そして、その後の大正3年3月に中学を卒業した岸の受験勉強は、次のごとくであった⁽⁹¹⁾。

私は中学を卒業すると間もなく上京し、本郷森川町の桜館という下宿に落着き、中央大学の予備校に通い受験準備をすることになった貞永〔敬甫〕君、難波〔吉田義人〕

(85) 岸信介・前掲Ⅲ注(133)①『我が青春』158頁。

(86) 岸信介・前掲Ⅲ注(133)①『我が青春』160頁。

(87) 岸信介・前掲Ⅲ注(133)①『我が青春』160-161頁。

(88) 〔七戸注〕南日恒太郎(著)・神田乃武(閲)『英文和訳法』(有朋堂、初版・明治40年)、南日恒太郎(著)・神田乃武(閲)『和文英訳法』(有朋堂、初版・明治40年)。

(89) 〔七戸注〕金沢久=奈倉次郎(詳解)『(青年英文学叢書・第1篇)金化力』(三省堂、明治36年)など。

(90) 岸信介・前掲Ⅲ注(133)①『我が青春』160頁。

(91) 岸信介・前掲Ⅲ注(133)①『我が青春』122-123頁。

君など、同宿した。両君は三高志望であった。近所の公盛館に原田幾造〔明治45年三高卒→大正5年東大法・政治学科卒〕、難波正太郎〔難波（吉田）義人の長兄。→黒川正太郎。明治45年一高卒→大正5年東大法・英法科卒〕の両君が下宿せられ、その指導を受け、又一高在学中の宮崎〔親友→森川親友。大正4年一高卒→大正7年東大法・政治学科卒〕、兄部〔謙輔。大正4年一高卒→大正7年東大法・政治学科卒〕両君からも激励を受けた。その中、桜館には笹木〔高一〕、原田〔三郎〕、中安〔閑一〕君等も同宿することとなり賑やかであった。賑やかになると兎角勉強よりも遊び癖がつき易く、又田舎から出て来て上野、浅草などの盛り場に接すると動もすればその刺激に眩惑せしめられる惧れがある。又当時の予備校は頗る雑然として居り、規律も節制もなく、休んだり遅参早退することも勝手であった。そんな雰囲気であったから今から思うと汗顔の至りであるが、笈を負うて家郷を出た時の決心も何処へやら、余り勉強をしなかった。

屢々映画（その当時は活動写真と言った）を見に行ったり、学校を欠席して寝そべて駄弁って居たりした。芝居にも時に行ったようでは楽座で見たイブセン劇『人形の家』やトルストイの『復活』が強い印象を与えた。前者は衣川孔雀がノラに扮し、後者は松井須磨子のカチューシャであったことも記憶に残って居る。

後に〔一高の〕私の級に首席で入学した我妻栄君の受験準備振りを聞いたことがあるが、同君は開成中学の予備校に通って居たそうである。同校の様子は、中央大学などの予備校と違い、人数も尠なく規律も厳格であったそうであるが、同君は規則正しく通学するのみならず、頗る熱心に準備一途に精進し、その結果は1貫目余り体重を減じ、通学途中本郷菊坂が途中で一息入れぬと上り切れなかった位弱ったと、思い出を語られたことがあるのに比較し、誠に恥じ入る次第である。

我妻の受験勉強に関しては、彼自身の言葉も引用しておこう。⁽⁹²⁾

一生の間に随分沢山の試験を受けた。その度に試験勉強をしたわけだが、一番辛かったのは高等学校の入学試験、つぎは、大学1年の試験、それから、大学の3年ときの高等文官試験。この3つは、私の一生の3大試験だった。

3つとも、いずれおとらず辛かったが、辛さの性質は多少違う。一高の入学試験は、

(92) 我妻栄「試験勉強の話」前掲注(68)〔所収〕①226頁、227頁、②227頁、228頁。

責任感と不安の念とに責められて、一番苦しかった。13貫〔1貫=3.75キログラム×13=48.75キログラム〕の病弱な身体から1貫目以上やせた。疲労こんばいしてゴールにかけこんで仆れた、といってもよいほどだった。それにくらべると、大学の1年の試験は、不安は不安でも、どっかに自信があった。高文の試験は、暑い盛りに、分量の多い勉強をするのが辛かったというだけで、不安というほどのものはなかったから、気は楽であった。

……〔中略〕……。

当時は3月に中学を卒業して6月に入学試験だったから、その間の3ヵ月を、神田のニコライ堂の下にある開成中学の予備校に通った。東京の中学を卒業した学生たちは、何とりにこうに見えたことだろう。田舎の中学の秀才は、言葉もロクに通じない。焦燥と不安の3ヵ月！ 文字通り骨身をけずった。

(イ) 江辺清夫

【187】「八人会」のメンバーのうち、我妻とともに開成中学の予備校に通った江辺清夫（〔別表Ⅳ-1〕⁽⁹³⁾）は、明治28年11月4日米沢藩元御馬組・江辺又四郎の四女・いよと婿養子・信次（学校長・郡視学から南原村の第9代村長）の長男として南置賜郡南原村猪苗代町2901番地に生まれた。仙台の第二高等学校を受験して現役合格し、我妻と同期で東京帝大法科大学（大正8年より法学部）に進む。大正9年卒業後は内務省に入省、山形・三重・熊本・神奈川の各県警察部長等を歴任し、昭和15年島根県知事（36代）、昭和15年福島県知事（38代）、昭和19年川崎市市長（7代）となるも、戦後の昭和22年GHQの命令で市長を辞職、公職追放となる。昭和25年1月11日没、享年⁽⁹⁴⁾54歳。

江辺の二女・美和子（昭和3年7月生まれ、有斐閣の我妻担当の編集者）によれば、「先生と父は生まれてから中学の頃まで、たれ憚ることなく米沢弁で育ったのだろう。高等学校受験のため、おそらく始めて上京して予備校に入ったら、米沢弁では

(93) 「義兄の孫田の忠告に従いまして、さっき申した小さい予備校に入りました。戦後亡くなりましたが県知事をした南原の中学の同期生、江辺清夫という男と2人で入ったのです」。我妻栄「地方の高校生の責任」前掲注（6）45頁……〔所収〕290頁。

(94) 『人事興信録（第13版・上）』（人事興信所、昭和16年）エ11頁、『続・米沢人国記（近・現代篇）』前掲Ⅲ注（108）71頁、『日本知事人名辞典（第1巻）』（日本図書センター、平成24年）226頁、『同（第2巻）』793頁。

相手にまったく通ぜず、予備校の先生に質問するときも、２人で一大決心をしてしゃべり出す等、言葉には、私の想像以上に苦勞したらしい⁽⁹⁵⁾」。

この点についても、我妻の興讓館高校での講演を引用しよう⁽⁹⁶⁾。

ところが、東京の中学校を卒業したやつって、世の中の事、何でも心得てるような顔をしている。先生が、色々な題を黒板に出しますとバラバラ言うんです。米沢の中学校の非常な秀才だなんて言われたって、こりゃ駄目だと思ったんです。今でもよく覚えていることを一つ二つ紹介しましょう。英語の時、和文英訳の試験をしまして「昨日の月曜は鎌倉を散歩し、帰りに大船に行つて鯛飯を食つた」という題だった。鎌倉とか大船とか解らん訳でもなかったが、「鯛飯」というのは見たことも聞いたこともない。今、米沢は大変文化が向上しているから解るでしょうが、鯛飯といつても解らん、知らんですよ。われわれは鯛飯を何と訳すのだろうと苦勞した訳です。東京の連中は皆心得ているんですね。解らんのは僕と江辺だけだったんです。それから、幾何の先生の証明について、もっと直裁簡明な方法があると思つたものですから、江辺と２人で「あれはちょっとおかしいぞ。俺たち知っているのと違うじゃないか」と言つたら、他の学生は「そうだ、そうだ。言え言え。」と言いますから、いきなり「ハイッ!!」と立ち上がつてしゃべつたんです。そしたら米沢弁が通じない。学生達は笑つていやがる。ところが先生は、言葉がわからなくとも、言っていることが解つたもんですから直ぐにピンときた。「君の方がいい」と言つて直された。学生のやつらは拍手喝采して「先生月謝割引キ!!」と言いやがるんです。その後、国語の先生が試験をした。初めから受験参考書にあるような問題が沢山出た。解らんから、私は、片っ端から解り申さず、と書いてやつた。そしたら先生がその答案を読み上げたのです。皆ワアッと笑つたわけです。先生は「こういう事は書かない方がいいよ。かえつて先生の心証を害する」と言いました。万事かくの如しで、もう破れかぶれでどうにでもなれと思つた。とても駄目かも知れないと思つて、３ヶ月を不安と焦燥の受験勉強をしました。

なお、江辺美和子の追懐談の中には、米沢弁の話のほか、吾妻連峰の秘湯・大平⁽⁹⁷⁾

(95) 江辺美和子「父のような先生」『追想の我妻栄——険しく遠い道』前掲Ⅰ注（63）283頁。

(96) 我妻栄「地方の高校生の責任」前掲注（6）45-46頁……〔所収〕290-292頁。

(97) 江辺美和子「父のような先生」前掲注（95）283頁「先生の本のお手伝いは20年以上もさせて頂いたが、あまり米沢弁らしき言葉は聞かれなかったが、年をとると誰でも昔の訛が出るといわれる。先生も70歳を越えられてからは、言葉の端々に米沢訛が聞かれるようになった」、「昔、

温泉の一軒宿の話が出てくる。「そこは中学の同級生の安倍〔寿太郎。〔別表Ⅳ-1〕②〕君というのがやっていて、昔行ったが、とても良い所だった。今どうなっているか」との我妻の言葉に、江辺は大平温泉を訪ねる。

一方、我妻は、死去の1か月前に米沢を訪れた折に「安倍君の戦死した息子の嫁さんが、俺の同級生〔別表Ⅳ-1〕の誰であるかは不詳〕の後添になっていてネ、その人に会ったよ。大平温泉は洪水〔大正15年豪雨災害〕のとき湯本が流されて、湯の出口がふさがれたが、すぐ掘らなかつたのでとうとう湯口が分からなくなって、駄目になってしまったそうだと江辺に語ったが、その時の我妻は「遠くの方をみるような、そして何かウツロな顔をなされた」という。

(ウ) 高橋恒次郎

【188】 我妻と同じく一高に大正3年現役合格した高橋恒次郎（〔別表Ⅳ-1〕⑭）に関しては、出生地や生年月日、両親や小学校等について調べ切れていない。我妻が一高第一部独法科首席合格であるのに対し、高橋が入学したのは仏法科で、入学時の席次は43名中13位。

1位は山内直元（1896-1970：府立四中卒、東大卒業後は住友銀行に入行、戦後は日本教育テレビ〔現：テレビ朝日〕社長）、7位には太田（泉山）三六（1896-1981：山形県・庄内中学卒、東大卒業後は三井銀行入行、戦後の昭和22年第23回衆議院議員総選挙で日本自由党公認・山形2区選出議員となり、翌昭和23年には第2次吉田茂内閣の大蔵大臣に抜擢されるが、泥酔して国会内で狼藉を働き「大トラ大臣」と呼ばれた）、9位には本野盛一（1895-1953：暁星中学卒、東大法学部政治学科卒業後は外交官）がいる。彼ら仏語クラスの一高・東大時代の生活については、泉山三六の自叙伝『トラ大臣になるまで』⁽⁹⁸⁾に詳しい。一方、本野盛一の長男・盛幸（1924-2012：学習院で平岡梓の長男・公威〔三島由紀夫〕と同級生、二高から海軍を経て東大卒業後は外交官）によれば、「一高時代の話は岸〔信介〕さんから聞いたことがあるが、祖父〔本野一郎〕が外務大臣の時〔在任：大正5年19月9日～大正7年4月23日〕に、岸さんとは一高で同級生だった親父〔本野盛一〕に、『舞踏会とか夜会というのはどんなもんか、おまえの親父が

父に英語を尋ねると『我妻のオヤジに習ったので英語は駄目だ、ドイツ語ならいい』とよく冗談をいっていたが……先生のお父上は中学の英語の先生をなさっておられたとのこと。きっと米沢弁の英語だったのかも知れない。

(98) 泉山三六『トラ大臣になるまで——余が半生の想ひ出』（東方書院・新紀元社、昭和28年）。

やってるんだから見せろ』と、カーテンの後ろに学生どもが隠れて、覗いたのだそうです⁽⁹⁹⁾」。

しかし、高橋恒次郎は、一高の１年を落第し、翌年入学の鈴木重助と同級になる（この学年には、野尻清彦〔大仏次郎〕・石崎政一郎・小林巳智次もいる）。以降は順調に進級・進学して、大正10年4月法学部法律学科（仏蘭西法専修）卒業後は、山形の陸軍歩兵第32連隊に一年志願兵として入隊⁽¹⁰⁰⁾、大正13年以降は第十五銀行（大阪）銀行員⁽¹⁰¹⁾、昭和7年以降は大阪市住吉区の藤永田造船所に勤務している⁽¹⁰²⁾。

（エ） 鈴木重助

【189】 本田吉馬は、一高に進学した同級生について、「翌年〔大正3年〕、絶えていた第一高等学校入学試験には我妻榮君、鈴木重助君、前記の高橋恒次郎君の3君が見事合格、気焔をあげた」と述べているが⁽¹⁰³⁾、鈴木の名は、翌大正4年度の『第一高等学校一覽』の生徒名簿に初めて登場しているの、大正3年の合格直後に休学届を提出したか、あるいは1浪して翌大正4年に入学したものと思われる。ともあれ大正4年に第一部1年五之組（仏語クラス。41人）に入った鈴木は、1年生を落第した高橋と同級となり、大正7年7月仏法科志望（36名）を卒業。

だが、同年の大学進学には今度は鈴木が失敗し、翌大正8年4月法学部経済学科から分離独立した経済学部（経済学科）に同年9月庄田次郎（2浪して二高進学。〔別表Ⅳ-1〕⑬）とともに入学。この間の事情に関しては、我妻の次のような文章がある⁽¹⁰⁴⁾。

郷里の米沢中学校を同期に卒業して、一緒に第一高等学校を受験し、第2志望のフ

(99) C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト『本野盛幸（元駐フランス大使、元外務審議官）オーラル・ヒストリー』（政策研究大学院大学、平成17年）98頁。

(100) 米沢有為会雑誌314号「会員名簿」（大正10年11月26日発行）追加△山形之部51頁。米沢有為会雑誌の「会員名簿」「会員動静」「消息」欄を用いての職歴・住所の探索については、市立米沢図書館・遠藤泰久氏のご指導を仰いだ。記して謝意を申し上げる。

(101) 米沢有為会雑誌337号「会員名簿」（大正13年11月26日発行）たノ部39頁、米沢有為会雑誌387号「会員名簿号」（昭和4年11月26日発行）たノ部37頁。

(102) 米沢有為会雑誌417号「会員名簿号」（昭和7年11月26日発行）たノ部81頁、米沢有為会雑誌495号「秋期特輯号」（昭和15年11月26日発行）たノ部101頁。

(103) 本田吉馬「守一無二無三」前掲Ⅰ注（102）23頁。

(104) 我妻榮「森戸事件の思い出など」東京大学経済学部（編）『東京大学経済学部五十年史』（東京大学出版会、昭和51年）912頁。なお、同書が我妻の死去後に刊行されたためであろう、我妻洋＝唄孝一の年譜（前掲Ⅰ注（3））に、この文章の掲記はない。

ランス語クラスに入学した友人があった。ボートの組選レースの選手にされたばかりに、フランス語のはじめのほうの講義をサボッたのでとうとう卒業までフランス語というものが身につかず、大正6年〔正しくは大正7年および8年〕に東大の入学試験を受けるときは、忘れかけた英語でやった。それでも法学部経済学科〔正しくは経済学部経済学科〕には入学できた。ありがたいご時世であった。そして大正9年〔正しくは大正11年3月〕にめでたく卒業したから「経済学士」と呼ばれた最初だったと思う。経済学部は大正8年から独立の学部となり、法学部の経済学科在籍者を編入して、経済学士を最初に送り出したのは、翌大正9年だったと思う。

「経済学士」という耳なれない肩書に、友人はすこぶる得意で、住友商事に採用され、インドのカルカッタかどこかに赴任したが、まもなくチフスに罹って客死した。生きておれば、経済学部創設50周年を大先輩の一人として祝うことができたのに、惜しいことである。

我妻の記憶は、鈴木就職先についても不確かで、入社したのは「住友商事」ではなく「住友銀行」、赴任先は「カルカッタ〔現在の名称はベンガル語のコルカタ〕⁽¹⁰⁵⁾」ではなく「ムンバイ」であって、米沢有為会雑誌には次のようにある。

○鈴木重助君 住友銀行孟買支店在勤の処曩にマラリヤに悩され其後チフスを病まれて専ら療養に尽され一時小康を伝えられしも遂に薬石効を奏せず同地に於て遠逝せられしは実に哀悼の至りに不堪、来る〔大正15年〕2月15日頃遺骨到着の日を俟ち東京興禅寺に於て追悼会を営まるる由なり

なお、我妻は、翌昭和2年（教授昇進の年）に鈴木重助の遺稿集を編んでいるが、この書籍については、目下のところ現物を実見できていない。⁽¹⁰⁶⁾

（４） 雨声会

【190】 一方、高橋与市の文章（【178】）で「八人会」と並んで登場していた「雨声会」⁽¹⁰⁷⁾については、本田吉馬の追想に、次のようにある。

(105) 米沢有為会雑誌349号（大正15年1月26日発行）「会員動静」「不幸」13頁。

(106) 我妻栄ほか（編）『鈴木重助君遺稿』（発行者不明・非売品、昭和2年）。鈴木が書いた戯曲・随筆・詩歌のほか、辻二郎ほかの追想集と、年譜からなる。追想集の中には我妻の文章も含まれていると思われるが、同書に関しても、我妻洋＝唄孝一の年譜（前掲Ⅰ注（3））には記載がない。

(107) 本田吉馬「守一無二無三」前掲Ⅰ注（102）23-24頁。

その後〔中学卒業後〕、高校、大学時代は勉強盛りなので、日常の交遊はないが、夏休みになると大挙帰省、しばしば会合、その度に在郷の留守居役として会場の準備の幹事役を勤めさせられた。今残っている数葉の写真に、未来の博士、財閥、閣下（軍人）それに米沢の、みどころの芸妓もうつつされているのも笑いの種である。

走りとんで老年時代に入って、同級生の親密の度が急に濃くなり、十数年前から、我妻栄、浜田広介、両君が中心となり、同級会が誕生し雨声会と名づけた。浜田広介君の発案である。時によると春秋２回、新宿の芙蓉館か、原宿の東郷会館、水交会を会場とした。いつも十数人集まった。中学時代の恩師桐生幹〔別表Ⅳ- 3〕^⑫先生も9歳のお高齢を、ものともせず、高円寺から来臨された。

……〔略〕……。

この会合には我妻栄さんの顔の見えないことは殆どなかった。それに米沢組を代表して高橋与市氏（元中条病院長）〔別表Ⅳ- 1〕^⑬、桜井克己氏（山形大学産研主事）^⑭、僕〔本田吉馬。②〕の３人、かかさず上京、東京おもてでは御三家と称してよろこばれ、郷里のうつりかわる発展の模様など報告しながら交情を温めた。

さらに、我妻の死去１か月前の米沢訪問についても、次のようにある。⁽¹⁰⁸⁾「昨年〔昭和48年〕の9月我妻栄博士の胸像除幕式の後、小野川温泉で雨声会を催したことは前にふれた。⁽¹⁰⁹⁾夫人同伴組も加わって殊の外なごやかであった。出席の小沢雄造〔別表Ⅳ- 1〕^⑥君の、酒田の親戚の方から、目下2尺もある鯛をわざわざ車を使って生きたまま贈られてきたので、生づくりの刺身にして貰って談笑裡に時をすごした」。

一方、「雨声会」の名付け親である浜田広介も、次のような文章を残している。⁽¹¹⁰⁾

〔この会は〕いまも時どき東京都内で開かれるが、東大名誉教授、民法学者の我妻栄さんを始め、博士がた、学士たち、元の将官、業界の社長、その他の諸君が集まることになっている。この会合には、米沢から、病院長の高橋与市さん、市議会議員の本田吉馬さん、大学関係の桜井克己さんと、ご三人は、たいてい、いつも出向いてこ

(108) 本田吉馬「守一無二無三」前掲Ⅰ注(102)24-25頁。

(109) 〔七戸注〕工藤正三「米沢興譲館高校と我妻栄先生——自願奨学財団を中心に」『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注(32)204頁にも「〔昭和48年〕9月20日、小野川温泉『あづま園』で夫人同伴の『雨声会』に参加」とある。

(110) 浜田広介「同級生交歓」『童話文学と人生』（集英社、昭和44年）192頁。

られる。そして、時間に間に合えば、その夜の列車か、その翌朝の列車かで米沢に帰ってゆかれる。友情のこまやかさ、義理のかたさ、というわけである。会の名を「兩声会」という。ひと時降る雨のように、さらりとしたもの、かりに名づけたのであるが、名付け人が、このわたくしになっている——「集まる諸君が、みんなりっぱで、ウルセイ会にならないウセイ会である。」などと直ぐにもダジャレを飛ばしてしまうのが、浜田の持病と、みんなは承知しているが、じつは、その夜の会合に雨がしとしと降りだしたので、ごく簡単に兩声会といったのである。

私見は、我妻が晩年になって米沢弁が出るようになった理由につき、兩声会で郷里の同窓と米沢弁を話す機会が増えたためと推測している。

なお、この会に関しては、松野良寅が、以下の資料の存在を指摘している。⁽¹¹¹⁾

今筆者の手元には、山森亀之助氏（大正3年卒・海軍少将・昭和62年8月25日没）〔別表Ⅳ-1〕⁽¹⁵⁾から寄贈された「兩声会資料」の手書き原稿コピーがある。兩声会幹事がこまめにまとめられた民俗学資料とも称すべき貴重なもので、そのなかには、「旧藩時代の米沢の生活」「米沢の年中行事」「米沢旧町名の由来」「米沢の方言」「思い出の菓子——煎餅餅・軽焼・つまみ煎餅・有平糖・越の雪・鉄砲屋町饅頭等々」「お正月を喜ぶ米沢地方の古い童謡」といった、エッセイ風の読み物である。職種・立場を異にする会員たちも、ひとしく中学時代にたちかえって「おのが郷土」を懐かしんだことであろう。……。

この資料は、幹事板屋胤雄氏手書き編集に成るもので、その発行日から推すに、昭和50年代まで継続されていたようである。⁽¹¹²⁾

この資料には、兩声会の成立経緯や開催日程、あるいは我妻栄や浜田広介ら会員の動静を伝える記事が掲載されているかもしれないが、現物を確認するには至らなかった。⁽¹¹³⁾

(111) 松野良寅「同窓先輩の友情——我妻栄・浜田広介と千喜良英之助」『我妻栄——人と時代』前掲Ⅱ注(32)319頁。

(112) 〔七戸注〕『創立満20年記念・山形県立米沢中学校一覽』（大正5年9月）前掲Ⅲ注(84)165頁の表記は「板谷」胤雄。大正4年（我妻栄・浜田広介の1期下）卒業、米沢郵便局勤務。

(113) 浜田広介記念館（東置賜郡高畠町）に問い合わせたところ、同資料の存在そのものを把握していないとの回答であった。浜田広介あるいは我妻栄の研究資料として価値あるものと考えられるので、探索・保存が行われることを切に望む。

なお、浜田広介は、昭和47年1月末より健康を害し、翌昭和48年3月米沢興譲館高校校歌・歌碑の除幕式、同月山形県東置賜郡川西町での講演を最後に病床に伏し、同年11月17日に死去

【191】 浜田広介（本名は広助：1893-1973）は、明治26年5月25日山形県東置賜郡屋代村大字一本柳館ノ内（現：高畠町）の農業・浜田為助・やす夫婦の長男に生まれ⁽¹¹⁴⁾た。小学校高等科の頃から「少年」（時事新報社）・「少年世界」（博文館）・「少年界」（金港堂）の懸賞作文に応募し、しばしば入選。小学校は高等科に進んで仙台陸軍幼年学校を受験するが失敗、明治41年4月山形県立米沢工業学校（現：山形県立米沢工業高等学校）染色科に入学するも10月に退学して中学を受け直していることから、明治42年4月米沢中学入学時の年齢は、我妻たち同級生より3歳年上である。

ア 卯月会

【192】 一方、大熊信行と浜田広介は、同年の早生まれ・遅生まれの関係で、大熊は明治39年米沢中学入学であるが、浜田らが入学した明治42年（大熊4年生）の秋に胃を病み、休学して東京の長与胃腸病院に入院したため留年し、翌明治43年4年生に復帰している。大熊が短歌を作り始めるのはこのころである⁽¹¹⁶⁾。

ところで、浜田の二女・留美の文章を引用すれば、「〔明治〕43年に行われた全校作文コンクールで、広介〔2年生〕は1等を受けた。翌年〔明治44年・広介3年生〕もまた、同コンクールで1等となり、そのせいかどうかはわからないが、以後このコンクールは取り止めとなってしまったという⁽¹¹⁷⁾」。

他方、明治44年5年生になった大熊は、沼沢東衛（不明）、高山辰三（大熊と同期、早稲田大学予科進学）と弟の高山喜三（不明。浜田らと同期の中退者か）、鈴木佐光（〔別表Ⅳ-1〕⑰）、江辺清夫（⑳）、藤堂俊雄（④③藤倉利雄か）、上泉秀信（㉞）、浜田広助（広介。㉟）らと「卯月会」を作り、同人誌「卯の花」を創刊するが、学校から

した。享年80歳。我妻栄の死去1か月後のことであつた。

(114) 『浜田広介全集・第12巻（評論・随想）』（集英社、昭和51年）232頁「浜田広介年譜」のほか、『興譲館世紀』前掲Ⅲ注（84）345頁、浜田留美①『父・浜田広介の生涯』（筑摩書房、昭和58年）、同②『（〔児童文学〕をつくった人たち5）〔ひろすけ童話〕をつくった浜田広介——父・浜田広介の生涯』（ゆまに書房、平成10年）。

(115) 明治41年3年生の学級担任は我妻の父・又次郎であつた。大熊信行『文学的回想』（第三文明社、昭和52年）30頁。

(116) 大熊信行『ある経済学者の死生観——大熊信行随想集』（論創社、平成5年）25頁「いわゆる3行歌というものは、私は明治43年ごろから作り、それを印刷物のうへで発表しつつ、大正年代におよんだのであるから、いわゆる3行歌なるものの系統の成立ということをいえば、啄木・哀果につづいたものは、疑いもなくわたしだったのである」。

(117) 浜田留美・前掲注（114）①13頁、②15頁。なお、浜田広介「わたくしの母校」『童話文学と人生』前掲注（109）142頁も参照。

会の解散を命じられ、同人誌も1号限りで廃刊となる。⁽¹¹⁸⁾

【193】私見は、明治44年の「作文コンクール」廃止と「卯月会」の解散命令は、同一の事情に基づくものと推測している。というのも、学校が主催した「作文コンクール」とは、「勅語課題作文」であって、興譲館高校の年史には「教育勅語に関する題を与え、優秀な作品には賞を与えた。明治41年から44年まで継続された」とある。⁽¹¹⁹⁾

明治36年の藤村操の自殺から、明治38年日露戦役終結後の虚脱感の中で、若者たちの「煩悶」する心は、忠君愛国の国家主義と立身出世主義から離れて、個人主義・自然主義・社会主義へと流れてゆく。⁽¹²⁰⁾

明治41年は、赤旗事件で第1次西園寺公望内閣が倒れ、第2次桂太郎内閣の内務大臣・平田東助（米沢出身者の出世頭。【67】I②）の主導で戊申證書が渙発され（【103】〔別表〕C③⑥）、地方改良運動が本格化した年であり、同年に米沢中学で始まった「作文コンクール」も、尽忠報国精神の立て直しを図ろうとする政府の施策を

(118) 大熊信行・前掲注(115)18頁、29頁、173頁、235頁。

(119) 『興譲館世紀』前掲Ⅲ注(84)303頁。

(120) 土門公記『藤村操の手紙——華嚴の滝に眠る16歳のメッセージ』（下野新聞社、平成14年）、平岩昭三『検証・藤村操——華嚴の滝投身自殺事件』（不二出版、平成15年）、森まゆみ＝中島岳志『帝都の事件を歩く——藤村操から2・26まで』（亜紀書房、平成24年）「一 煩悶青年を生み出した本郷」19頁、猪股忠『藤村操——追跡・日光投瀑死事件』（ブイツーソリューション、令和3年）。

(121) 平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌——「西洋」を読み替えて』（新曜社、平成24年）、木村洋『文学熱の時代——慷慨から煩悶へ』（名古屋大学出版会、平成27年）、和崎光太郎『明治の〈青年〉——立志・修養・煩悶』（ミネルヴァ書房、平成29年）、中島岳志（著）・頭山ゆう紀（写真）『超国家主義——煩悶する青年とナショナリズム』（筑摩書房、平成30年）。

(122) 藤村操と京北中学で同級の魚住影雄（折蘆）が、藤村の没後1周年に一高「校友会雑誌」（137号、明治37年5月）に草した「自殺論」の冒頭は「人生の意義は自家要求の充実を外にして探ぬべからざる者也」というものである。なお、山崎時彦「折芦・魚住影雄について（1）～（2・完）」法学雑誌22巻2号（昭和50年）270頁、3号（昭和51年）435頁参照。

(123) 第1次西園寺公望の文部大臣・牧野伸顕は、明治39年4月28日地方長官会議で行った訓示演説で「近頃青年者が贅沢に流れ不当の学資を費やし学資以外多額の金子を費消し或は空理に走り哲学めきたる事に心を傾け早く既に悲観的人生観をなす者あり」と述べ（東京朝日新聞明治39年4月29日朝刊2面「牧野文相の訓示」、明治39年6月9日文部省訓令第1号には「近年発刊ノ文書图画ヲ見ルニ或ハ危激ノ言論ヲ掲ケ或ハ厭世ノ志操ヲ説キ或ハ陋劣ノ情態ヲ描キ教育上有害ニシテ断シテ取ルヘカラサルモノ尠シトセス」「又頃者極端ナル社会主義ヲ鼓吹スルモノ往々各所ニ出沒シ種々ノ手段ニ依リ教員生徒等ヲ迷惑セムトスル者アリト聞ク」とある。

(124) 平岡敏夫『日露戦後文学の研究（下）』（有精堂出版、昭和60年）404頁は、文芸書の発禁処分が明治41年から激増しているのも、明治41年10月14日戊申證書の渙発と関係しているとする。

けたものと推測される。

だが、浜田広介が1等賞を受賞した明治43年には大逆事件が発生し、石川啄木にいう「時代閉塞の現状」⁽¹²⁵⁾の中で、翌明治44年1月に幸徳秋水らが処刑されて社会主義には「冬の時代」が訪れ、2月には帝国議会で南北朝正閏問題が論議され、6月には岡村司の岐阜県教育会での講演が問題視され、7月美濃部達吉の文部省中等教員夏季講習会における国体論を発端として上杉慎吉との間で第1次天皇機関説論争が開始され、11月には天皇の列車脱線事故の門司駅構内主任引責自殺に対する山川健次郎の人命尊重論が物議を醸した。

こうした状況下において制定された「高等中学校令」（明治44年7月31日勅令217号）の下で、生徒に対する思想統制は一段と強化された。米沢中学における大熊信行・浜田広介らの「卯月会」解散命令も、その一環と考えられる（なお、山口中学における岸信介らの同人誌の廃刊（【185】②）も、同様の事情に基づくかもしれない）。

だが、浜田は、学校が主催する教育勅語の作文コンクールで連続受賞のお墨付きを与えた学生であり、加えて、明治44年の米沢中学は、興譲館の先輩らの主導する校風刷新運動の渦中にあった。明治45年（＝大正元年）以降の作文コンクール（勅語課題作文）の途絶は、以上のような諸事情が複合した結果であるように思われる。

イ 文芸部・果樹林社

【194】 平貞蔵は、「大熊信行さんや浜田広介君とは、中学の校友会の文芸部で一緒にやった程度で、家に行ったりきたりということは全然しなかった。大熊さんは絵や詩歌が非常にうまかったが、のちに政治、経済のことを論ずる人になるとは全然思わなかった。／浜田広介君については、彼のクラスにもっとうまい人がいたけれども、女学校の先生になって死んでしまった」⁽¹²⁶⁾「その浜田君と、中学時代、校友会

(125) 啄木がこの論説を書いたのは、大逆事件に関する最初の新聞報道から2か月後で、内容は魚住折芦「〔文芸欄〕自己主張の思想としての自然主義（上）（下）」東京朝日新聞明治43年8月22日朝刊3面、23日朝刊3面に対する反論であるが、生前の発表は叶わず、土岐善麿（編輯）『啄木遺稿』（東雲堂、大正2年）で日の目を見た。文中には「すべて今日の我々青年がもっている内訌的、自滅的傾向は、この〔自然主義の〕理想喪失の悲しむべき状態をきわめて明瞭に語っている。——そうしてこれはじつに『時代閉塞』の結果なのである」とある。なお、助川徳是「啄木と折蘆——『時代閉塞の現状』をめぐって」（洋々社、昭和58年）、若林敦「『時代閉塞の現状』と『自己主張の思想としての自然主義』——啄木・折蘆比較論における有効な視座を求めて」長岡技術科学大学言語・人文科学論集6号（平成4年）25頁参照。

(126) 〔七戸注〕同期の師範学校進学者は、〔別表Ⅳ-1〕⑰鈴木佐光、⑲佐藤俊夫、⑳藤倉利雄（藤

雑誌の編纂を終えて、文芸部担当の先生〔北岡安見。〔別表Ⅳ-3〕⁽¹²⁷⁾〕のところに持っていったことがある」と述べている。

その後、平が卒業した大正2年、5年生となった浜田は、文芸部で校誌「興讓」の編集を続ける一方、短歌仲間9名で「果樹林社」を結成した。⁽¹²⁸⁾

ウ 無銭徒歩旅行

【195】 このうち、文芸部で浜田らが編集した校友会雑誌「興讓」には、大正2年5年生の夏休みに浜田が級友3人と行った無銭旅行の紀行文「檜原印象記」が掲載されているという。⁽¹²⁹⁾ 後年の浜田の文章を引用すれば——、⁽¹³⁰⁾

大正2年は、1913年にあたる。今を去ること56年、その年、7月25日、夜中に起きて、ぼくら4人は、みずからとなえる無銭旅行の旅に立った。4人というのは、小林〔孝一〕⁽¹³¹⁾、鈴木〔佐光。〔別表Ⅳ-1〕⁽¹⁷⁾〕、船山〔一雄。⑦〕、浜田の県立米沢中学生、5年生のなかまでである。

集合地は、米沢市内の成島橋、小松町（現在の川西町）で夜が明ける。古いメモには「諏訪峠で朝食、松原部落通過、級友、須貝広司〔58〕君の家に立寄る。7時ごろ、手の子を過ぎて宇津峠にさしかかる。」とある。

一方、浜田らとはほぼ同時期に、「風紀刷新宣言文起草委員会」〔【169】〕委員長の我妻栄と副委員長の本田吉馬も、同じような徒歩旅行に2人で出かけている。⁽¹³²⁾

〔大正2年〕7月の某日、我妻栄君が突然訪ねてくれた。きくともう8月の夏休みにもなる。毎日松川の魚釣りでもあるまい、名案がないかという。僕も我妻君の旅行好きなことは承知していたし、このたびは親達にお金の無心はせずに1週間位の日程で、山形廻り相馬原釜海水浴場遊覧を提案したら、二の句もなく賛成、2人でプランをたてる。第1日目は山形まで、勿論全行程徒歩だ。山形は僕の小学校時代の恩師

堂俊雄?）、⑤伊藤正雄、⑥土佐林秀逸、⑨矢島富五郎の6名である。

(127) 『平貞蔵の生涯』前掲注 (23) 38頁。

(128) 浜田留美・前掲注 (114) ①14頁、15頁、②16頁、17頁。

(129) 浜田留美・前掲注 (114) ①14頁、②16頁。

(130) 浜田広介「回想の旅——無銭旅行」『童話文学と人生』前掲注 (110) 199頁。

(131) 〔七戸注〕彼については、浜田広介「回想の旅——無銭旅行」前掲注 (130) 208頁に「小林君は剣道達者、からだもがっちりしていたが、今も健在、時たまに中学時代の同級会に現われる」とあるが、『創立満20年記念・山形県立米沢中学校一覽』の卒業者名簿（〔別表Ⅳ-1〕）には記載がない。

(132) 本田吉馬「守一無二無三」前掲I注 (102) 21頁。

木村多門先生（木村有恒君厳父）宅。次は笹谷峠を越えて川崎町の小学校、翌日は仙台大河原町の西沢宅（我妻君縁故）、次は原釜海水浴場に到着、最後に、北畠顕家の霊山神社に参拝帰宅と、運は天にまかせた。

……海岸を２人でそぞろ歩きをしていると、同級生の高橋恒次郎〔別表Ⅳ-1〕⁽¹⁴⁾・【188】君、兄貴の岩太郎〔明治39年米沢中学卒業〕（東大学生、後の大蔵組社長）さんに偶然出会った。……。

我妻栄記念館が、記念館開館20周年記念事業の一環として発行した児童向けの小冊子⁽¹³³⁾を、米沢市内の小学校5年生に配布したところ、収録されている6つのエピソードのうち一番心に残った話として、赤井運次郎との師弟愛と並んで、この無銭徒歩旅行を挙げた児童が多かったという。⁽¹³⁴⁾

こうした貧乏旅行は、当時の学生・生徒の間で盛んに行われており（おそらく大学生・高校生の文化が中学生に伝播したものであろう）、平貞蔵も、明治44年（中学3年）の夏には野宿して朝日岳登山、明治45年（中学4年）の夏には友人と仙台・松島に徒歩旅行、大正2年（中学5年）の夏には一人で新潟旅行に出かけている。⁽¹³⁵⁾さらに、我妻栄の終生の盟友・中川善之助に関しても、松岡修太郎（1896-1985：中川と金沢一中・四高の同級生）は、「彼はスポーツにも万能であったが、……われわれ仲間では犀川や金石の海で泳ぎ、無銭徒歩旅行で親不知まで出かけたこともあった。これが後年、彼の研究活動に耐えた体力作りとなっている」と述べている。⁽¹³⁶⁾

エ 「文章世界」「生活と芸術」

【196】 明治44年に大熊信行が作った「卯月会」には、浜田広介や我妻栄と同学年（3年）の上泉秀信も参加していた。彼は、上泉運一郎・やす夫婦の5人の子（3男2女）の末子として明治30年2月12日西置賜郡豊原村黒沢（現：飯豊町）に生まれた。上泉家は剣聖（新陰流の祖）上泉信綱の末裔で、上杉藩では250石取りの上士である。⁽¹³⁷⁾西置賜郡長井町の小学校から明治42年米沢中学に入学、大正3年卒業後は浜田

(133) 『故郷を愛した民法学者・我妻栄先生』（米沢有為会、平成24年……〔2刷〕令和元年）。

(134) 山田隆弘「我妻栄先生の小冊子をいただきました」我妻栄記念館だより24号（令和元年）3頁。

(135) 『平貞蔵の生涯』前掲注（23）32-33頁。

(136) 松岡修太郎「（追悼随想・中川先生の思い出）学問志向への彼の道程」『中川善之助・人と学問』前掲Ⅱ注（16）118頁。

(137) 上泉秀信『わが山河』（羽田書店、昭和15年）197頁、中山雅弘『農民作家・上泉秀信の生涯』

広介とともに早稲田大学予科に進むが、絵画に熱中し、同年11月学費未納で除籍⁽¹³⁸⁾（〔別表Ⅳ-1〕の⑧浜田の進路が「私立早稲田大学」〔本科〕であるのに対し、⑦上泉の進路が「洋画自修」になっているのは、そのためである）。

なお、明治45年3月に中学を卒業して上京した大熊信行が、同年（大正元年）10月土岐善麿（哀果：1885-1980）の知己を得たことから、大熊在学当時の「卯月会」散命令の後に、「果樹林社」を結成した浜田広介・上泉秀信らの短歌グループは、大正2年より哀果が短歌欄の選者を務める「文章世界」と「生活と芸術」の2誌に投稿するようになる。

① 「文章世界」——同誌の創刊は明治39年3月、発行元は博文館で、「中学世界」（明治31年9月創刊）の投書欄と定期増刊を独立させる形で成立した雑誌である⁽¹³⁹⁾。哀果が同誌の「文叢欄」「短歌」の選者になったのは大正2年の8巻7号からで、米沢中学の生徒では、鈴木佐光（〔別表Ⅳ-1〕⑰）・松浦柏葉（文見：⑥⑥）・上泉秀信（⑦⑦）・浜田唾鳥（広助：⑧⑧）・高山喜三（不明）⁽¹⁴⁰⁾らの歌が掲載されている。

② 「生活と芸術」——同誌の創刊は大正2年9月、土岐哀果が石川啄木と発行を計画していた雑誌「樹木と果実」が、啄木の死去（明治45年4月13日）で頓挫したために生まれた雑誌で、創刊号には米沢中学校生の短歌が「七人集」として掲載された。以降、大正5年6月終刊（3巻10号）までの34冊には、太田幸一（孝市。別表Ⅳ-1）⑨）・鈴木佐光（⑰）・江辺清夫（⑳）・小笠原常蔵（㉔）・遠藤義雄〔㉔〕・松浦柏葉（文見：⑥⑥）・上泉秀信（⑦⑦）・浜田唾鳥（広助：⑧⑧）・横井直次（大熊信行と同級）・高山喜三（不明）・飛木左章角（不明。筆名と思われる）ら11人の作品が掲載⁽¹⁴¹⁾されている。我妻栄の米沢中学の同級生は、早熟の歌人集団だったのである。

（歴史春秋社、平成26年）23頁。

(138) 中山雅弘・前掲注 (137) 46頁。

(139) 永井聖剛「『文章=世界』を生きる中学生たち——『中学世界』から『文章世界』への移行」愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇1号（平成23年）1頁。なお、津端修「『文章世界』総目録（1）～（14）」学苑230号（昭和34年）～250号（昭和35年）。

(140) 大滝十二郎『近代山形の民衆と文学』（未来社、昭和63年）91頁、216頁。

(141) 大滝十二郎・前掲注 (140) 73頁、218頁。なお、318頁には、「生活と芸術」大正3年3月号に掲載された、浜田と上泉の中学5年当時の歌の引用がある。いずれも啄木調の3行分かち書きである。

浜田 『青い鳥』——
わが先生のテーブルの
原書をのぞくわが身は貧し

（５）秀才と文学少年

【197】 中学校首席の秀才の中には、盛岡中学（明治41年卒）の小野清一郎（1891-1986）のように、我妻と異なり特別な受験勉強もせず⁽¹⁴²⁾に進んだ一高・東大でも首席を通じた文学少年もいる⁽¹⁴³⁾。我妻の『近代法における債権の優越的地位』は、有斐閣『学術選書』の「（１）」（昭和27年刊）であったが、翌年刊行の「（２）」は、小野清一郎『犯罪構成要件の理論』であり、同書の「あとがき」には「結局、構成要件の理論は、私の『悲しき玩具』であったとおもはれる」とある⁽¹⁴⁴⁾。

しかし、小学校をオール甲で通じた宮沢賢治が、盛岡中学では劣等生に転落してしまつたように、学業そつちのけで歌作に傾倒してしまう生徒もいる。

岸信介も、小野清一郎と同様、中学時代ほとんど勉強していないが、一方、同人誌への論文・小説・俳句の寄稿【183】②）に関していえば、彼の「ソツのない」性格（そしてこれと不即不離の醒めたニヒリズム）からすれば、彼はおよそ文芸に没入するタイプではない⁽¹⁴⁵⁾。

ア 我妻栄

【198】 我妻と同級の短歌グループの中には、我妻の親友・江辺清夫の名も認められる。「軟派」の江辺は我妻を作歌に誘つたであろう。そして、我妻は、そうした友人からの誘いも振り切って、独りひたすら勉学に勤しんだのだろう。

上泉 あさはやく
父の前なる、わが働きも
いつはりのごとく思はれそめし

(142) 「あこがれのまとの一高を希望したのですが、特に試験を意識した勉強はしませんでした」。小野清一郎「“刑法改正”のことなど」野村二郎『法曹あの頃（上）』（日本評論社、昭和53年）108頁。

(143) 『新・人国記7』（朝日新聞社、昭和39年）19頁の取材記事には、「盛岡中学では石川啄木の後輩、一高時代に本郷にいた啄木をその下宿・赤心館にたずねて山上憶良を中心に万葉論をやつたとむかしをなつかしむ」「パリにいた時、啄木の歌『東海の小島の磯の』を仏訳し、その短詩型にあふれる叙情のゆたかさを詩人のルネ・ギールにほめられた、とも語る」とある。

(144) 小野清一郎『犯罪構成要件の理論』（有斐閣、昭和28年）487頁。

(145) なお、岸信介『岸信介回顧録』（廣済堂出版、昭和58年）483頁「詩人、岸信介」の項には、昭和34年5月10日の母の日に発表された岸信介（作詞）・大木惇夫（補訂）「母を讃える歌」が掲載されているが、しかし、岸自身は「ただこの作品は私が作ったものではない。私にはそのような記憶はない。しかし私は、母〔茂世〕を非常に尊敬し懐かしく思っていたので、何かにつけて母の思い出を話していた。それを聞いた人のなかのだれかが、私の気持ちを推し量つて作詞したのではないかと思う」と述べている。真の作詞者は、大木惇夫（1895-1977）であろう。

江辺清夫が浜田広介らの短歌グループに入っていなければ、二高ではなく一高に行けたかどうかは分からないし、もし我妻栄が短歌作りに熱中していたら、一高に入学できたかどうか分からない。我妻は⁽¹⁴⁶⁾いう。

ところで、なぜ中学時代に私はチャッカリだったかという、わたしにはそれ相当の理由があったのですけれども、今日はその話はいたしません。ただ、もし私が中学校で、あんなにチャッカリした生徒でなかったらどうだったろうかと考えても、どうにもならないことです。

私はあのようにチャッカリした生徒であったから、第一高等学校に1番で入って、その習慣がずっと私をもち続けていったので、第一高等学校でのんきな生活をしたのにも拘わらず、やはり卒業は1番であった。そして大学の成績も相当であったから、大学に残ることができて、今日あるに至ったのかも知れないと思います。もしそうしなかったら、今日あるに至ったかどうかはわからないと思います。

歴史というものは、実験してみるわけにはいかないものです。ですから、私のようにチャッカリして中学を終ることがいいのか、あるいは、そのときからのんびりした人物を造っていこうとしたことがよかったのか、どっちが私にとってよかったのか考えてみたところでどうにもならないことです。そうだとすれば、私はどうすればよいのか。

過去に私がそういう中学生であったということは、長所もあるだろうと思います。そのために、私は得したこともあっただろうと思います。その得したところを今更悔やんでもしょうのないことだ。だからその得してえたところを踏み台にして、それから後の自分を、何とかして鍛錬していこうとつとめるほかないだろうと考えたのは、一高3年間の生活であったといってもよいだろうと思います。

イ 浜田広介

【199】 我妻栄や浜田広介が在籍した当時の米沢中学は、一方では政府による思想・風紀の統制強化があり、他方では興譲館の先輩による校風刷新＝進学率向上の圧力が加わっていたが、5年生の我妻が委員長を務めた「風紀刷新宣言文起草委員会」(【169】)にいう「風紀刷新」なる語が、時の政府の政策の意味を含んでいるのかは、

(146) 我妻栄「日本人は今世界中から憎まれている」前掲注(1)12-13頁……〔所収〕326頁。

この宣言文の現物を読んでみないと分からない。

一方、短歌同人の解散命令は、もっぱら時の政府の施策を受けたものと推測されたが、しかし、浜田広介もまた、我妻とはまったく別の形で、興譲館の先輩による校風刷新運動の影響を受けた。それが、浜田が卒業生名簿の末尾に書かれる原因となった「小便事件」である。

この事件に関して、平貞蔵は、次のように記しているが⁽¹⁴⁷⁾、

翌年、彼が卒業するとき、彼自身、なにか豪傑的なことをやってみたかったのだろう、大きな雨天体操場に寒いから炭火をどんどん起しているところへ行って小便をかけてしまった。そのために、彼は同級生より何カ月か遅れて学校を出るはめになった。——事件の発生は、平が大正 2 年 3 月に卒業し、浜田が 5 年生になった後の、同年 12 月の話であり、「なにか豪傑的なことやってみたかったのだろう」という平の憶測は、一面では当たっているとは思いますが（ただ、この年代の男子生徒にありがちな行動が、今も昔も（岸信介がそうであるように）夜遊びと喫煙・飲酒であることからすれば、非常に幼いようにも感じるが⁽¹⁴⁸⁾）、浜田自身の言によれば、事件の正確な経緯ならびに動機は、以下のようなものである⁽¹⁴⁹⁾。

〔大正 2 年 4 月〕 5 年生になるにおよんで、甲乙 2 つの仲間に争いが起き、中立派若干名が利用されたことに気づいて、わたくしは大いに憤慨、真の校風刷新か、それとも、それにかこつけてやる自派勢力の拡張か、声明か、策謀か、真の校風刷新なら、こうするわれを制裁せい、とばかりに校舎内の下足ぬぎ場のタタキのゆかに小便をたれたのである。時は 12 月、タタキの上にふぶきが白く吹きこんだ朝、雪のおもてに小便は金色の輪を描いたのである。しかし、一つの鉄拳（てっけん）も、この頭に落ちなかった。

翌年〔大正 3 年〕 3 月、卒業試験終了、25 日に卒業式というまぎわ、小便事件が突として明るみに出て〔校風刷新運動に関わる生徒が卒業時期を見計らって教師への注

(147) 『平貞蔵の生涯』前掲注 (23) 38-39 頁。

(148) 大熊信行・前掲注 (115) 175 頁も、「浜田が興譲館中学を落第したのでないことは、すでにいった。しかし同校の卒業式当日に証書がもらえず、若干日の延期処分を受けたのは事実である。真相はわからないが、卒業直前に、控所のあらぬ場所に、子どものように小便をしたという話がある」とする。

(149) 浜田広介「わたくしの母校」『童話文学と人生』前掲注 (110) 143-144 頁。

進に及んだものらしい)、職員の会議にまわされ、岡山出身の教頭妹尾〔盛親。〔別表Ⅳ-3〕⑫〕先生は、処罰を重くと主張されたというのであるが、米沢出身の校長(松山〔亮。⑧〕先生のとをついで)下平忠良〔⑭〕先生は、憫察(びんさつ)されてか、処分をゆるめて、卒業証書授与の日づけを3月31日とされたのである。

その日、下平校長は、モーニングを着用され、平服の妹尾教頭、福岡出身の担任藤本〔憑太郎。⑬〕先生のご兩人を側に立たせて、たったひとりの、ふらちな生徒、わたくしに卒業証書をくだされた。興譲館の歴史をほこる校長室、「君が代」も歌われず、オルガンも鳴らされず、ちょっとの間に授与式は終わったのである。

興譲館の先輩の圧力に端を発する校風刷新運動の甲乙2派の一方は、我妻栄や本田吉馬の「風紀刷新宣言文〔=浜田にいう「声明」とはこれか〕起草委員会」と解されるが、浜田から中立派を派閥抗争の道具にしようと画策した陰謀家や、これに憤った浜田の行動を教師に密告した生徒が、誰であったかを明らかにする資料は発見できていない(「チャッカリ秀才」と自嘲する我妻の所業ではないとは思うが)。

なお、大正元年10月松山亮に代わって校長に任ぜられた下平忠良は、着任後直ちに「生徒心得綱領」(米沢中学校「生徒心得」第1条(綱領)「本校生徒ハ教育ニ関スル聖旨〔=教育勅語〕ヲ奉体シ智ヲ開キ徳ヲ修メ以テ立身報国ノ基本ヲ確立センコトヲ期スヘシ)を制定して、⁽¹⁵⁰⁾時の政府の施策に忠実な生徒指導を行ってきたきわめて謹厳実直な人物であるけれども、浜田一人に卒業証書を授与するためだけにわざわざモーニングを着用したのは(教頭と担任は平服である)、浜田に対して何か感ずるところがあったのかもしれない。

2 米沢藩・上杉家と雲井龍雄

【200】 高等学校に進んで以降の我妻と、郷里・米沢との関係についても触れておこう。

大正3年9月一高に入学した我妻栄と高橋恒次郎(【188】)は、1浪した1級上の島津忠預(一高→東大医。陸軍軍医少将)・平貞藏(三高→東大法。【176】)とともに、米沢有為会に入会する(推薦人は高橋岩太郎(高橋恒次郎の兄。【195】)と孫田秀春⁽¹⁵¹⁾)。

(150) 山形県立米沢興譲館中学校(編)『沿革史』前掲注(19)103-104頁。なお、『創立満20年記念・山形県立米沢中学校一覽』前掲Ⅲ注(84)40頁も参照。

米沢有為会は、明治22年11月23日在京の米沢出身者6人（伊東忠太〔67〕〔別表Ⅳ②⑥〕、鳥山南寿次郎〔19〕・内村達次郎・長谷部源次郎と、宮島幹之助・村井三雄造の兄弟）が発起人となって、同郷人から有為の（＝国家社会に役立つ）人材を育てる目的で創設された団体であり、総裁には旧米沢藩主・上杉家当主を推戴し、歴代会長は栄達した旧米沢藩の重臣・側近の子弟が務めた。我妻たちが入会した頃の総裁は上杉憲章（上杉茂憲（最後の米沢藩主）の長男）、会長は平田東助であり、明治42年には小石川区表町109番地に寄宿舎「興讓館」を建設、明治44年からは奨学金の貸与事業を開始する。

興讓館寮（館長には吉田熊次が就任した）には北沢敬二郎〔181〕や大熊信行が⁽¹⁵²⁾寮し、大熊信行は明治45年第2回奨学金貸費生、平貞蔵は大正3年第4回貸費生であったが、⁽¹⁵³⁾少々奇妙に感ずるのが我妻栄で、平と同年入学の我妻は、奨学金の貸与を受けておらず（同年の一高の貸費生は北村徳太郎である。平〔176〕）、また、大学に進学して一高の寮を出た後、興讓館寮にも入っていない。にもかかわらず、大学進学後の我妻は、米沢有為会の評議員（機関誌「米沢有為会雑誌」編集担当）に⁽¹⁵⁴⁾任せられ、その後長きにわたって（大正10年助手になって以降も）⁽¹⁵⁵⁾興讓館寮内の編集部で雑誌編集に従事している。

（１）米沢有為会雑誌

〔201〕ところで、我妻洋＝喙孝一の年譜では、我妻が「米沢有為会雑誌」に寄稿した文章が落ちているので、年代順に掲記すれば〔別表Ⅳ-5〕のようになる。

松野良寅は、これらの記事のうち、②「所謂先輩に対する青年者の希望及要求」と⑥「郷里の会」に⁽¹⁵⁶⁾注目している。

(151) 米沢有為会雑誌245号（大正3年9月）「新入会員」40頁。

(152) 大熊信行・前掲注（115）77-78頁によれば、「館長の吉田熊次は、ふだんは顔もみせず、なんら監督の任に当たっていたわけでもないが、貸費生の一人が文学に凝り、学校をきらっている風説を耳にすると、これを小石川林町の自宅にびびつけ、どういふ所存であるかを、ただした」という。

(153) 大熊信行・前掲注（115）77頁、平貞蔵・前掲注（23）54頁……〔176〕参照。

(154) 米沢有為会雑誌275号（大正6年9月）「第27回総会記事」19頁および裏表紙の役職一覧参照。

(155) 米沢有為会雑誌314号の奥付には「大正10年11月26日発行／編輯兼発行人 我妻栄」「発行所 東京市小石川区表町109興讓館内 米沢有為会雑誌発行所」とあり、同号・裏表紙の役職一覧には「編集部」「部長 四谷区葺筒町73 我妻栄」とある。

(156) 松野良寅「米沢の精神風土と我妻栄先生」前掲注（3）182頁、184頁。

〔別表Ⅴ-5〕 我妻栄「米沢有為会雑誌」寄稿記事

①	「自由か平等か」	289号（大正8年1月）11頁、 290号（2月）1頁	21歳：大学2年
②	「(時事題言) 所謂先輩に対する青年者の希望及要求」	299号（大正9年1月）7頁	22歳：大学3年
③	「法律と屁理屈」	302号（大正9年5月）2頁	23歳：大学3年
④	「故小林源蔵氏を悼む」	306号（大正10年1月）3頁	23歳：大学院特選給費学生
⑤	「借家法の話」	310号（大正10年6月）1頁	24歳：助手
⑥	「郷里の会」	364号（昭和2年6月）1頁	30歳：教授
⑦	「家族制度と民法の改正」	413号（昭和7年5月）1頁	35歳：教授

ア 「所謂先輩に対する青年者の希望及要求」

〔202〕 まず、②「(時事題言) 所謂先輩に対する青年者の希望及要求」について。

この企画への投稿者を掲載順に挙げれば、(1) 我妻栄、(2) 大熊信行、(3) 香坂要三郎、(4) 鈴木重助（〔別表Ⅴ-1〕④）、(5) 井熊幸作（〔別表Ⅴ-3〕⑭）、(6) 橋本徳二、(7) 舟橋栄、(8) 高橋恒次郎（〔別表Ⅴ-1〕⑭）、(9) 三瓶温、(10) 山下寿郎、(11) 相田岩夫、(12) 斉藤和也、(13) 西野操、(14) 高橋与市（〔別表Ⅴ-1〕⑫）、(15) 高橋勝平の計15名。

このうち(4) 鈴木重助は「若い者をもっと理解して下さい」という懇願調、(8) 高橋恒次郎は「大先輩に対してはそろそろ有為会の実権を御譲り下さることを望みます。中先輩諸賢は徒に大先輩の跡を追ふことなく、先づ有為会の刷新の御準備あらん事を望みます」と反抗的、(14) 高橋与市は「私の希望としては最少し多くの先輩に接触したい事で御座います」と無難にまとめる大人の対応であるが、(2) 大熊信行は、大人の対応を超えて、「あらゆる意味に於る『先輩』に対して曾て何等の要求をも感じたることなく、ただ賛嘆、畏敬、尊愛の念を懐き或は憐愍、顰蹙を禁じ能はざるのみ。要求は常にただ自己に対して有するのみであります。右御返答迄。忽々」と、松野良寅もいうように懇懇無礼そのものである。

一方、(1) 我妻栄は、どちらかといえば(8) 高橋恒次郎寄りの文章であり、

全文を転記すれば、次のごとくである。

『所謂』附の先輩は二言目には『青二才が理屈を言っても世の中の事はそう簡単にいくものぢゃない』と仰せになる。然し之等の人達もきつと青年時代には先輩から『世の中を知らない理屈ばかりの者』として取扱はれながら大いに反抗しつつ宿弊を改めて今日あるに至られたものに違ない。唯多くの方は年と共に旺盛した精神力が衰へると何時の間にか周囲の事情に妥協し順応して動きが取れなくなる。そこに次の代の者が生々した自由な思想で昔その人達の為された様に此処に突貫して来る、すると自尊心の強い人達には今度は自分の妥協順応している弊風は所謂世の中と思はれ、不合理な事が所謂複雑なものに見えるので、『若い者は駄目だ』と云ふ事になり、甚だしきは『俺達の時は世の中は簡単だったから若い者でもよかったが今日ではどうしてどうして』と云ふ事になってしまうのだらうと思はれます。

然し、勿論所謂先輩の妥協と順応から進歩は生れ出ない。不羈奔放な青年の思想からのみ文化進歩の原動力は生じて来る。所謂先輩の専売特許たる『複雑な世の中の知識』は唯其の奔逸なる原動力のあまりに線路外に飛び出すを止める制動機として価値あるに止るものと信じます。

従て私の希望は。

- 一、飽くまでも進歩的な思想で理想を示し乍ら青年を理解し之を指導して下さる事——此の理想の先輩はブレーキでなくて理想に走るレールです。私も『所謂』の冠詞をつけません。
- 二、是の出来ない多くの所謂先輩は『若い者は駄目だ、世の中は複雑だ』と云ふ独断を棄て、青年の価値を認めその理想をも聞いて相提契して進む丈の雅量が頂き度い、——これがブレーキ本来の使命と存じます
- 三、最小限度に於ては青年に対する非難はもっと理論的にやって下さる事、独断に基く頭ごなしの叱責は現代の青年には（極めて少き場合の）全人格の沈滞か（大多数の場合の）極度の反抗か二つの一つしかありません、急激にブレーキをかければ機械の破壊か脱線に終るのみであります。

イ 「故小林源蔵氏を悼む」

【203】〔別表Ⅳ-5〕④は、米沢有為会の発展に大きな貢献を果たした大先輩に捧げる追悼文にもかかわらず、我妻の筆鋒はさらに厳しさを増している。

又氏は其主観的立場から有為会の現状にも少なからず不満を抱いて居られたらしい。然れども氏は、氏が心血を注がれた有為会は今や漸く慈父の手を離れて独り立ちせんとして居るのである。統一的団体としての存在を完成し、その内部より生ずる綜合意思に動かんとして居るのではあるまいか。青年思想の移り行くことは止むべくもない。社会思潮の変わりゆくことは拒むべくもない。従って有為会が此後氏の考と異なる進路を歩み行くことも或ひは禁じ難いことであらう。然し乍ら、氏が之に依って達せられんとした郷里米沢の人材教養と実質的繁栄との大理想は永遠に変ることなく歩一歩築かれて行くことであらう。そして又何時の世にか『郷里』と云ふものについてその先輩の如く伝統的興奮を感じ得ざる時代が実現するの日があっても社会進化の途上に於ける氏の功績は燦然としてその光を失ふ日はないであらう。

この文章は、後年彼が記した、牧野英一への追悼文⁽¹⁵⁷⁾を想起させる。「牧野先生に対する長年の敬慕の念がガラガラと音を立てて崩れるのをどうにもしようがなかった」「公私にわたる永年の恩義を想い、先生に対する気持の転換に心をくだいたつもりではあったが、かたくなな私の心を遂に旧に復することはできなかった。いま先生の霊⁽¹⁵⁸⁾に対し、私の心は痛む」と結ばれる我妻の弔辞に、周囲は驚きを隠せなかったが、封建的な遺風を擁護した牧野に対する極端な嫌悪の感情は、学生時代の郷里の大先輩に手向けた言葉を、繰り返したもののように見える。

ウ 「郷里の会」

【204】〔別表Ⅴ-5〕⑥「郷里の会」の冒頭では、彼がどのような心情で有為会雑誌の編集を行っていたかが明らかにされる。

編輯部の香坂〔要三郎〕君からは是非何か書いて呉れとの頼み、嘗て編輯部の仕事をさせられたことのある私には、雑誌のメ切りになって原稿のないことの苦しみをよく理解することが出来るので、とうとう承諾することにした。繁忙の間に筆をとる。さて書くとなると外に書くことは何もない。実は私にとって、唯々『有為会といふものに対して自分の心の中に今特別に何の感興もない』といふことだけが有為会に対する唯一の感想である。……。

(157) 我妻栄「牧野英一先生の思い出」〔初出〕『牧野英一先生を偲ぶ』（有斐閣、昭和45年）……〔所収〕『民法と五十年・その2——随想拾遺（上）』前掲Ⅱ注（87）390頁。

(158) 四宮和夫「アガベ的愛とエロスの愛」『追想の我妻栄』前掲Ⅰ注（63）177-178頁。

雑誌編輯には私も少なからず苦心をした。原稿を募集する為に毎月適宜な題を選んで解答を求めて紙面ににぎやかにしやうともした。其の当時新しい試みとして世人の注視を受けた朝日新聞の『鉄箒欄』に真似て短文を募っても見た。『有為会改造案』といふやうな題さへも掲げて見た。勿論その都度自分も秃筆をなめることを怠らなかつた。然し今にして思へば、何れも初期〔所期〕の目的を達しはしなかつた。郷里の先輩を歴訪して談話をして貰ってその筆記を載せれば有益な原稿はいくらも得らるゝと忠告して呉れた人があつたけれども、それ丈けはしなかつた。專業の記者でないかぎりその暇が到底なかつたからである。勿論かくしてまでも雑誌を有意義なものにしやうとする『熱心』があつたらその暇が全然えられなかつたのもあるまいけれども、その『熱心』は持ち合はせなかつた訳である。

この文章からは、前記〔別表Ⅳ-5〕②「(時事題言) 所謂先輩に対する青年者の希望及要求」が、実は我妻の「自作自演」企画であつたことが知られるが、一方、④「故小林源蔵氏を悼む」で言及されていた郷里の遺風護持に関しては、次のようにある。

私は去年の夏米沢に帰った折に、上杉伯爵邸が、その大部分を東京に移転せらるゝとかいふことが米沢人士の間に問題とせられて居ることを耳にした。そして一部の人は米沢の郷土的精神を涵養する中心点として、伯爵邸の今日の俵に存置せられ、少くも新年の儀式の如きは本邸の実を失はざる様にすべきことを要望して居らるゝやうなことを聞いた。そしてその時、郷里の一部の人々がそれ程重大視せらるゝことが、私の気持ちのうちでは全くどうでもよいやうに考へてる自分を発見して驚いた。

……。『郷里』の先君の遺徳といふが如きものは、学生の思想の一端にだにも触れ得ないのは寧ろ当然のことではあるまいか、……。

中学時代は興讓館の先輩の圧力に容易に屈する「チャッカリ秀才」で、大学進学後も唯々諾々と有為会雑誌の編集を続けていた我妻の心の内に、いったいつの時点から、郷土の遺風を尊ぶ精神に対する懷疑の念が生じたのだろう。

（２） 雲井龍雄を懐ふ

【205】 先に引用したように（【176】）、我妻より1級上の平貞蔵は、中学時代から「米沢に対して批判的な頭も少しもっていた」。米沢藩・上杉家の遺風を奉ずる大先輩（彼らはいずれも旧藩主の重臣・側近の子弟という、生まれながら立身出世に恵まれた環

境の人たちである。【67】〔別表〕参照)にとって頭が痛いのは、上杉景勝や赤穂浪士の件もさりながら、「明治維新のとき、奥羽列藩同盟の中心は仙台の伊達藩と上杉藩だったけれども、また途中でさっさと方針を変えて薩長に降るようなことをした」行動である。平のように「どうせやるといって立上がったら滅びるまでやっただらいではないか……。そういう意味で私は会津が好きだし、庄内藩が好きだ」との思いを抱く米沢人も多く、そのような人間は、門閥エリートたちが唱道する米沢藩の遺風にはなびかず、雲井龍雄に走る。

ア 雲井会

【206】 雲井龍雄の本名は小島龍三郎⁽¹⁵⁹⁾。基本的には幕藩体制維持の守旧派であるが、彼の憎悪は、とりわけ薩摩藩に向けられた。天皇の名に隠れて権力を掌握せんとする野心を感じ取ったのである。

奥羽列藩同盟が結ばれた慶応4年、雲井は6月越後口の戦場で「討薩之檄」を起草して徹底抗戦を主張するが、しかし、8月1日新潟陥落で戦意を喪失した米沢藩は、親戚筋の土佐藩からの勧告を早々に受け入れて9月1日降伏し、盟主の一角の腰砕けのために列藩同盟は瓦解する。

翌明治2年9月雲井は新政府の集議院に登用されるも1か月で辞職し、明治3年浪士らを糾合する動きに出たため、内乱の嫌疑をかけられ、同年12月26日斬刑・梟首の末、遺骸は小塚原の刑場に打ち捨てられた。

【207】 ところが、その後、雲井龍雄の名は、予想外の形で復活する。明治7年以降の自由民権運動において、雲井が新政府の藩閥専制に対する抵抗の先駆とみなされるようになったのである。

米沢における雲井復権の功労者は、山形を代表する民権家・山下千代雄（【67】〔別表〕Ⅱ①）⁽¹⁶⁰⁾であった。山下は、明治14年5月谷中・天王寺に雲井の墓碑を建立した際「先生を地下に瞑せりむるは他に其道あり」と述べたという。「『其道』とは何か。ほかでもない。自由民権運動である」⁽¹⁶¹⁾。

(159) 詳細は安藤英男『新稿・雲井龍雄全伝（上巻）（下巻）』（光風社出版、昭和56年）のほか、近時の文献として、友田昌宏『東北の幕末維新——米沢藩士の情報・交流・思想』（吉川弘文館、平成30年）。

(160) 山下千代雄については、高橋良彰「ボアソナードと入会争議——山下千代雄の活動を媒介として」遠藤浩先生傘寿記念『現代民法学の理論と課題』前掲注（37）234頁参照。

【208】 明治22年大日本帝国憲法発布に際して発せられた大赦令によって、雲井の国事犯としての汚名は晴らされた。

そして、時代は下って昭和5年、米沢市長・登坂又蔵らにより「雲井会」が設立されて、雲井の六十年忌法要が行われ、翌昭和6年には『志士雲井龍雄伝』が刊行された。「雲井会」に名を連ねた米沢の名士156人の中には、伊東忠太（【67】〔別表〕VI②⑥）のほか、我妻栄の名前もあるというが、名簿の現物を確認できていない。⁽¹⁶²⁾

イ 一高弁論部練習会

【209】 我妻栄に関する資料で、雲井龍雄の名が登場する最も古い記事は、大正5年（我妻：高校2年）の校友会雑誌における弁論部の活動報告で、掲載内容をそのまま転記すれば、以下の通りである。⁽¹⁶³⁾

△練習会（4月28日於二大教場）

一、感想	一、二、一	蠟山〔政道〕委員	〔群馬県高崎中〕
一、放任すべし	三、一、一	飯島文宜君	〔私立独逸協會中〕
一、悲しき因果	一、二、一	円地〔与四松〕委員	〔石川県小松中〕
一、私の驚きと悲み	一、二、四	安孫子理兵衛君	〔山形県山形中〕
一、雲井龍雄を懐ふ	一、二、四	我妻栄君	〔山形県米沢中〕
一、文明を呪ふ文明	二、二、三	土井不曇君	〔岡山県私立金川中〕

安孫子、我妻両君の演説は本日の壇上を飾った二大演説であった。

「一、二、一」は「第一部、二年、一之組」の意味である。「二大演説」として我妻とともに名が挙がっている同じ四之組（独語クラス）で山形県人の安孫子理兵衛については、後に触れるであろう。

当面の問題は我妻の演題「雲井龍雄を懐ふ」である。演説の中身について記した資料は発見できていない。しかし、その内容が、郷土の英雄・雲井の事績を讃えるものであることはおそらく間違いなく、そして、それはすなわち、米沢藩のふがいなさに対する批判的姿勢を表明することでもある。

(161) 友田昌宏「雲井龍雄と米沢の民権家たち——精神の承継をめぐる」友田昌宏（編）『東北の近代と自由民権——「白川以北」を越えて』（日本経済評論社、平成29年）287頁。

(162) 河北新報令和2年3月23日朝刊7面「(社説)雲井龍雄顕彰活動／人物解明 現代に生きる」。

(163) 第一高等学校校友会「校友会雑誌」258号（大正5年）37頁。

我妻が幕末・維新の米沢の歴史の詳細を知ったのは、平貞蔵と同様、中学時代のことであろう。しかし、中学時代の我妻は、米沢の遺風を奉ずる興讓館の先輩によって引き起こされた校風刷新＝進学率向上運動の心理的重圧に、一方的に押し潰されるばかりであった。

【210】——ここまで考察を進めてきた段階で、「我妻君というのは元来非常に穏健派なのですね。そして体制派なのですが、ところがときどきそうでないことを彼はしているのですね」という中川善之助の言葉（⁽¹⁶⁴⁾【26】）を、改めて考え直してみると、我妻に認められる温厚と過激の両極性は、普段は目上にすこぶる従順な子供が、内心に抱えていた感情をごく稀に爆発させて周囲を驚かせるのと、似ているように感ずる。

一方、後年の牧野英一への追悼文（【203】）に顕著な、封建的な身分関係に対する極度の嫌悪は、米沢中学の「チャッカー秀才」時代の原記憶に起因しているようにも思われる。

【追記】我妻が末妹（四女）千枝子に宛てた4枚の絵葉書（我妻堯「4枚の絵はがき（兄弟愛）」前掲Ⅱ注（132）1頁）については、『故郷を愛した民法学者・我妻栄先生』前掲注（133）8-9頁に、下記①→②→③→④の順でカラー写真が掲載されている。

この絵葉書を所蔵する山形県立図書館にお問い合わせしたところ、①②③については日付の記載がなく、消印も判読不能のため、住所や文面から発信時期を特定するしかない、とのお返事を頂戴した。

そこで、まず宛先を見てみると、㊦米沢の鉄砲屋町4134番地の家は、大正6年5月29日の米沢大火で類焼を免れたが、その後、一家は、㊧父・又次郎の実家（北寺町西ノ丁）から、㊨信夫横町へと転居し（㊩㊪とも転居日不詳）、㊫大正7年10月18日に鉄砲屋町の家を売却した後（前掲注（40））、㊬大正10年10月一家は上京して

(164) このほか、中川は、次のようにも述べていた。「誰かが新聞か何かに書いた我妻君への追悼文の中で、君が一面非常に反骨であったというようなことが見えていたように覚えている。これは反骨という語の使い方にもよるわけだが、元来、反骨のとか反骨精神とかいうと、どこか激情的な気持を含んでいるように思われるが、そうした面だけから見ると、我妻君を反骨的だというのは少しばかり当たらないように思われる」。中川善之助「理性院本覚榮法居士」『追想の我妻栄——険しく遠い道』前掲Ⅰ注（63）57頁。

	宛先	差出人（栄）住所	文面
①	山形県米沢市鉄砲屋町 我妻千枝子チャン	トウキョウシ、本ゴ ウク、コマゴメ、ホ ウライチヨウ、ソ ンダサマカタ	「ガッコウガヤスミニナリマシタカ」 ……大正6年7月？：千枝子7歳（小 学1年）・栄20歳（大学1年）
②	山形県米沢市鉄砲屋町 我妻千枝コサマ	トウキョウ、シバ、 カミヤチヨウ、 二十九パンチ、コウ トクガクリョウ	「ニイサンハモウ五ネンモヨネザワノ ハナラミマセン」……大正7年4 月？：千枝子8歳（小学2年）・栄21 歳（大学1年）
③	米沢市信夫横町 我妻又次郎様方 我妻千枝子様	芝区神谷町廿九 宏徳学寮	「まだみたことのない米沢の家がどん なものか」……大正8年？：千枝子 9歳（小学3年）・栄22歳（大学2年）
④	東京府下瀧の川田端 八三 我妻千枝子様	(パリ発・1925年)	「英語の本を二冊ずつ、合計六冊送っ たからお友達の○○さんに上げなさい」 ……大正14年：千枝子15歳（高女 5年）、栄28歳（助教授）

我妻と一緒に暮らしている（【83】）。

一方、差出人である我妻の住所についていえば、大正6年7月一高を卒業し、9月東大に入学した彼は、なぜか米沢有為会の寄宿舎（「興譲館」。【200】参照）には入らず、①半年以上孫田秀春の家に寄宿した後、②翌大正7年3月に神谷町の「宏徳学寮」に入っている。この寮については後に触れることとして、大学入学以降の我妻の住所を列挙すれば、以下のようになる。

- ① 大正6年7月（一高卒業後）「東京市本郷区駒込蓬菜町6 孫田秀春方」（米沢有為会雑誌277号（大正6年11月）15頁）
- ② 大正7年3月「東京市芝区研〔神〕谷町〔29〕宏徳学寮」（米沢有為会雑誌281号（大正7年3月）16頁）。
- ③ 大正9年7月（大学卒業後）「小石川区小日向台町鳩山〔秀夫〕方」（米沢有為会雑誌303号（大正9年10月）裏表紙役職一覧）
- ④ 大正10年3月（鳩山留学後）「本郷区森川町一、新坂通359 蓋平館別荘」（米沢有為会雑誌308号（大正10年3月）奥付頁「おしらせ」）
- ⑤ 大正10年「6月 四谷区笹笥町73」（米沢有為会雑誌311号（大正10年7月）奥付頁「転居御報せ」）、同年10月米沢中学を退職した父・又次郎が妻・つる、四女・

千枝子と同居（米沢有為会雑誌314号「会員名簿」（大正10年11月）12頁）

- ① 大正12年6月我妻海外留学に出発、その間一家は「東京府下瀧の川田端83」に住むが（大正12年9月1日関東大震災に関する我妻の文章中に「東京の田端にいる両親と妹や結婚して市川や千駄ヶ谷にいる姉妹〔市川には大正9年に伊藤祐吉と結婚した妹（三女）うめ、千駄ヶ谷には大正3年に孫田秀春と結婚した姉（二女）千代子が住む〕の家族の安否はどうしてもわからない。幸にも一同無事のことを知ったのは、2ヶ月も後になってのことであった」とある。我妻栄「セツルと穂積・末弘先生」福島正夫＝川島武宜（編）『穂積・末弘両先生とセツルメント』（非売品、昭和38年）45頁……なお、この文章も、我妻洋＝唄孝一の年譜に掲載されていない）、同所への転居時期は不明（我妻留学前の転居か）。
- ② 大正14年12月帰国、大正15年4月鈴木緑と結婚、昭和2年「東京府下高田町上屋敷3559」に転居（米沢有為会雑誌366号（昭和2年10月）53頁）。
- ③ 昭和4年「東京府北豊島郡石神井村大字田中宇長光寺1071」に転居（米沢有為会雑誌385号（昭和4年9月）36頁）……前掲Ⅱ注（58）参照。

——以上の住所と文面から推測するに、4枚の絵葉書のうち、①は大正6年の夏休み時期（7～8月）、②は大正7年の米沢の花見時期（4～5月）、③は、漢字まじりのひらがな書きに変わっていることから、千枝子が小学校3年以上の上級学年に進んだ時期（大正8年4月以降）のものと考えられる。

一方、④の絵葉書は留学中の大正14年パリから送られたものである。